

# 平成25年度佐賀県小・中学校学習状況調査及び全国学力・学習状況調査を活用した調査Web報告書

Web報告書もくじ> IV 意識調査結果の分析

## IV 意識調査結果の分析

### 児童生徒意識調査結果の分析に当たって

#### 1 分析の方針

児童生徒意識調査の分析に当たっては「学校生活」「学習動機」「学習活動(教科全般)」「家庭学習」「生活習慣等」というカテゴリーに分けて分析を行った。なお、カテゴリーについては、第I章の「6 調査内容」及び後述する「3 意識調査質問項目の構成」にある質問項目の構成に基づいて分けている。

それぞれの設問については、

- ① 今回の調査に見られるおおまかな傾向
- ② 小学5年から中学3年までの5学年を通じた比較
- ③ 同一学年での定点比較(昨年度の小学6年と今年度の小学6年というような比較)
- ④ 回答状況と平均正答率との関連

という観点から調査結果の分析を行った。

#### 2 分析に当たって留意した点

- (1) 分析の対象となるデータについては、「回答状況と平均正答率との関連」を見る関係上、各学年において全教科(小学5年、小学6年は4教科、中学1年は4教科、中学2年、中学3年は5教科)のペーパーテストを受検した児童生徒のデータを、有効回答としている。各学年の有効回答者数と有効回答者率は、下記のとおりである。

	有効回答者数	全回答者数	有効回答者率
小学5年	7,708人	7,996人	96.4%
小学6年	7,982人	8,334人	95.8%
中学1年	7,938人	8,161人	97.3%
中学2年	7,699人	8,051人	95.6%
中学3年	7,465人	7,813人	95.5%

- (2) 本章で記述する「平均正答率」については、有効回答者の全教科(小学5年、小学6年は4教科、中学1年は4教科、中学2年、3年は5教科)の平均正答率を用いた。
- (3) 「回答状況と平均正答率との関連」についての記述については、それぞれの回答選択肢を選択した児童生徒全員の正答率の平均を求めて比較した。選択肢の回答状況によりそれぞれの回答選択肢を選択した児童生徒数は異なるため、児童生徒数が極めて少ない回答選択肢については、その正答率を比較することが適切でない場合も考えられる。このような場合については、その旨を文中に記した。

## 3 意識調査質問項目の構成

## ア 質問項目の構成

- (ア) 学校生活
- (イ) 学習動機
- (ウ) 学習活動(教科全般)
- (エ) 学習活動(各教科)
- (オ) 家庭学習
- (カ) 生活習慣等

質問項目とそれぞれの設問との関係は以下の表のとおりである。

※ 小学校第6学年、中学校第3学年は全国調査の質問紙調査を実施。

質問項目		小学校 [全46問]	中学校 [全49問]
(ア) 学校生活		1・2・3・4	1・2・3・4
(イ) 学習動機		5・18(ア・イ・ウ・エ)・ 20(ア・イ・ウ・エ)・35・ 36	5・18(ア・イ・ウ・エ・ オ)・20(ア・イ・ウ・エ・ オ)・38・39 ※18(オ)・20(オ)は中2のみ
(ウ) 学習活動 (教科全般)		15・16・17・37	15・16・17・40
(エ) 学習活動 (各教科)	国語	19ア・22・23・24・25	19ア・22・23・24・25
	社会	19イ・26・27・28	19イ・26・27・28
	算数 数学	19ウ・29・30・31	19ウ・29・30・31
	理科	19エ・32・33・34	19エ・32・33・34
	英語		19オ・35・36・37 ※中2のみ
(オ) 家庭学習		6・7・8・9・10・11・ 12・13・14	6・7・8・9・10・11・ 12・13・14
(カ) 生活習慣等		21・38・39・40・41・42・ 43・44・45・46	21・41・42・43・44・45・ 46・47・48・49

## イ 質問の意図

## (ア) 学校生活

学校生活の楽しさ、好きな授業の有無などについて問うことにより、児童生徒の学校生活の実態を把握する。

## (イ) 学習動機

勉強に対する興味や有用性、将来の夢や目標の有無について問うことにより、学習動機の高さについての実態を把握する。

## (ウ) 学習活動(教科全般)

自分の考えを発表する機会や児童生徒の間で話し合う活動の頻度、自分の考えの表現に対する抵抗感について問うことにより、児童生徒の学習活動全般の実態について把握する。また、電子黒板などのICTを活用した授業の分かりやすさと利用状況を問うことにより、その効果と利活用の状況を把握する。

## (エ) 学習活動(各教科)

各教科の内容の理解度についての自己評価、各教科の特性に応じた学習内容や学習方法についての児童生徒の興味・関心・意欲・態度について問うことにより、それぞれの教科についての学習活動の実態について把握する。

## (オ) 家庭学習

授業以外の勉強時間や勉強の内容、塾や家庭教師の有無など児童生徒の学習方法全般について問うことにより、児童生徒の家庭学習の実態について把握する。

## (カ) 生活習慣等

読書時間、テレビやゲームなどの時間、就寝時刻、朝食や家の手伝いの頻度、地域における行事などへの参加の頻度などについて問うことにより、児童生徒の家庭における生活習慣の実態について把握する。

## 教師意識調査結果の分析に当たって

## 1 分析の方針

教師意識調査の分析に当たっては、第 I 章の調査内容の中で述べた質問項目の構成から「教科全般における指導法の工夫」「学習環境の活用」「家庭学習への関与状況」「学校組織マネジメントに対する意識」というカテゴリーに分けて、分析を行った。

それぞれの設問については、

① 今回の調査に見られる全体的な傾向

② 学校スコアによるグループ比較

という観点から調査結果の分析を行った。

## 2 分析に当たって留意した点

- (1) 分析の対象となるデータについては、昨年度、小学校第4学年、小学校第5学年、小学校第6学年、中学校第1学年、中学校第2学年を担当した教師の2月調査での回答を用いている。回答者数は、下記のとおりである。

	回答者数
小学校	1203人
中学校	962人

- (2) 教師意識調査の回答選択肢を指導の頻度や内容に応じて点数化し、各学校の有効回答者の平均を求めたものを学校スコアとしている。詳細は第 I 章の [註](#) を参照していただきたい。
- (3) 指導状況の違いを明らかにするために、各設問ごとに小、中学校の学校スコア上位四分の一の学校群をAグループ、下位四分の一の学校群をBグループとして、グループにおける平均正答率の状況を比較した。基本的にAグループがその指導が多く行われている(又は、意識が高い)学校群、Bグループがその指導があまり行われていない(又は、意識があまり高くない)学校群となっている。

## 3 意識調査質問項目の構成

## ア 質問項目の構成

カテゴリ	小学校	中学校
(ア) 家庭学習への関与状況	設問2～8	設問2～8
(イ) 学習環境の活用	設問9～12	設問9～12
(ウ) 教科等全般における指導法の工夫	設問13～16 設問18～21	設問13～16 設問18～21
(エ) 教科の特性に応じた指導法の工夫	設問17 設問22～31	設問17 設問22～34
(オ) 学校組織マネジメントに対する意識	設問32～34	設問35～37

## イ 質問の意図

## (ア) 家庭学習への関与状況

宿題を出している頻度や出している宿題の内容(予習的宿題・復習的宿題など)、宿題に関する指導状況について問うことにより、家庭学習への関与状況を把握する。

## (イ) 学習環境の活用

授業におけるICT機器の活用頻度や活用場面、学校図書館の活用頻度とその活用内容を把握する。

## (ウ) 教科等全般における指導法の工夫

発展的な課題を取り入れた授業の実施状況、理解が十分でない児童生徒に対する授業外での対応状況、書いて表現する活動や話し合い活動を取り入れた授業の実施(教科の授業・総合的な学習の時間)、身に付けさせたい力を意識した総合的な学習の時間の指導、学習方法についての指導状況、学習形態の工夫、目標や評価規準を明確にした授業の実施について問うことにより、発展的学習・補充的指導・表現力の育成、総合的な学習の時間の指導、学習方法の指導、学習形態の工夫、目標を明確にした指導などの状況を把握する。

## (エ) 教科の特性に応じた指導法の工夫

国語における言語活動、読書指導、社会における調査学習を生かした発表・討論、算数・数学における算数(数学)的活動、問題解決的な学習、理科における見通しをもった観察や実験とそのまとめ、英語におけるコミュニケーション能力を高める指導や書く活動などについて問うことにより、各教科の特性に応じた指導法の工夫の状況を把握する。

## (オ) 学校組織マネジメントに対する意識

教育活動方針の理解、方針や内容についての共通理解、職員間の雰囲気について問うことにより、学校組織マネジメントが児童生徒の正答率や児童生徒の学習に対する意識に及ぼす影響を把握する。

最終更新日：2013-6-27

## 平成25年度佐賀県小・中学校学習状況調査及び全国学力・学習状況調査を活用した調査Web報告書

[Web報告書もくじ](#) > IV 児童生徒意識調査結果の分析

### 児童生徒意識調査結果の分析

[児童生徒意識調査結果の分析に関わる全てのグラフ](#)

#### 1 学校生活

- 学校生活に楽しさを感じている児童生徒の割合は、どの学年においても9割を上回っていた。また、学校に行くことに楽しさを感じている児童生徒の割合は、8割を上回っていた。学校生活や学校に行くことに楽しさを感じている児童生徒ほど平均正答率は高くなっていた。[図1][図2][図3]
- 友達と会うことに楽しさを感じている児童生徒の割合は、全ての学年において9割を上回っており、楽しさを感じている児童生徒ほど平均正答率は高くなっていた。[図4][図5]
- 学校の授業の中で、好きな授業があると感じている児童生徒の割合は、小学5年が最も高く、学年が上がるに従って、その割合は低くなっていた。好きな授業がある児童生徒ほど平均正答率は高くなっていた。[図6][図7]

ここでは、児童生徒の学校生活について、学校生活の楽しさと全教科平均正答率との関連から分析を行った。

#### ア 「学校での生活は楽しい」「学校に行くのは楽しい」について

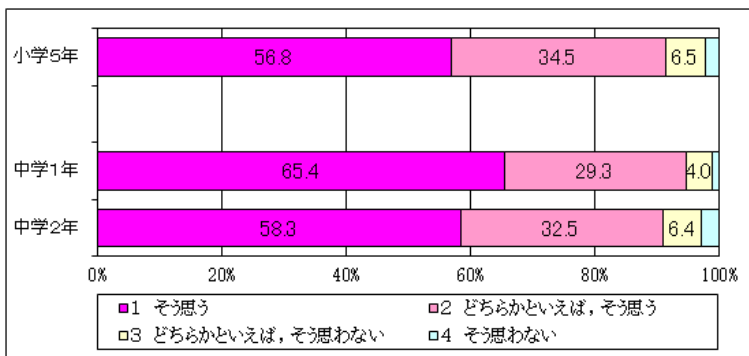


図1 「学校での生活は楽しい」の回答の割合

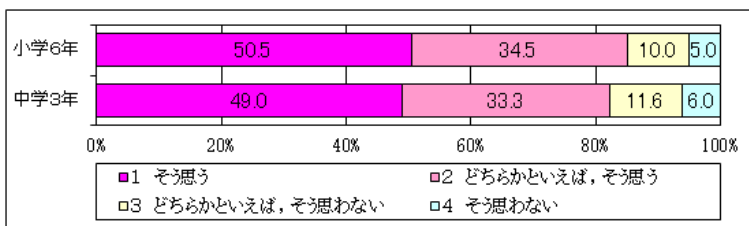


図2 「学校に行くのは楽しい」の回答の割合

佐賀県が実施した意識調査の設問「学校での生活は楽しい」において、「そう思う」「どちらかといえば、そう思う」と回答した児童生徒の割合は、小学5年91.3%、中学1年94.7%、中学2年90.8%となり、どの学年も9割を上回る結果となった。国が実施した意識調査の設問「学校に行くのは楽しい」において「そう思う」「どちらかといえば、そう思う」と回答した児童生徒の割合は、小学6年85.0%、中学3年82.3%となり、どちらの学年も8割を上回る結果となった。特に、中学1年では94.7%と最も高い割合となった。【図1】【図2】

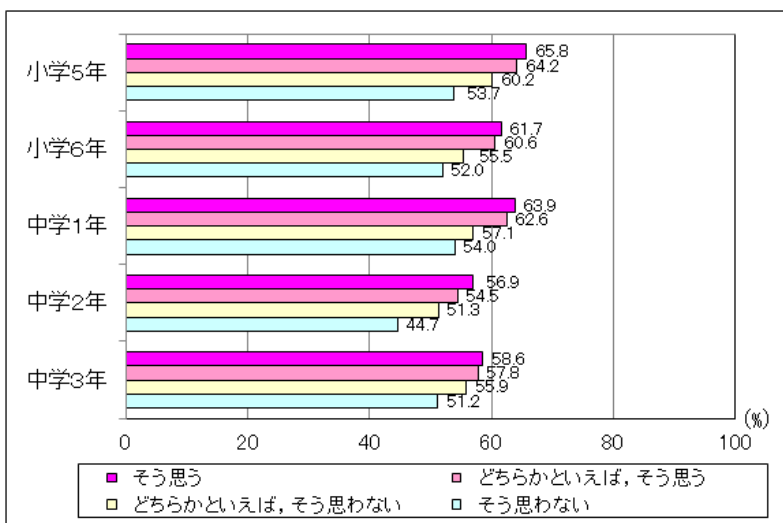


図3 「学校での生活は楽しい」「学校に行くのは楽しい」の回答状況と正答率

回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、全ての学年において、「そう思う」と回答した児童生徒の平均正答率が最も高くなっている。「学校での生活は楽しい」「学校に行くのは楽しい」と回答した児童生徒ほど、平均正答率が高くなっている。【図3】

## イ 「友達に会うのは楽しい」について

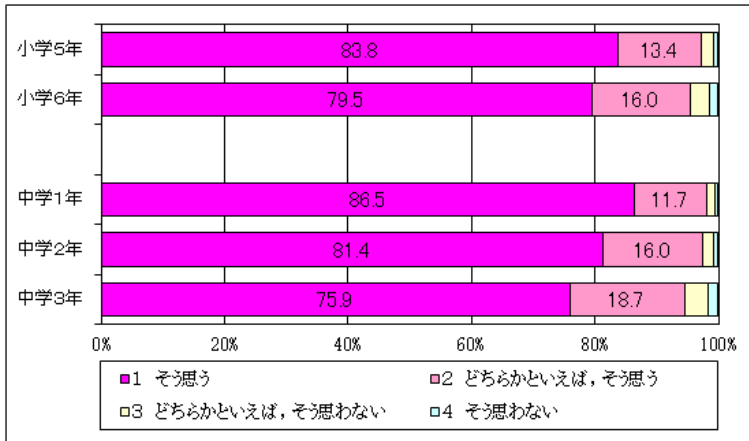


図4 「友達に会うのは楽しい」の回答の割合

「そう思う」「どちらかといえば、そう思う」と回答した児童生徒の割合は、小学5年97.2%、小学6年95.5%、中学1年98.2%、中学2年97.4%、中学3年94.6%となり、全ての学年で9割を上回る結果となった。特に、中学1年では98.2%と最も高い割合であった。[図4]

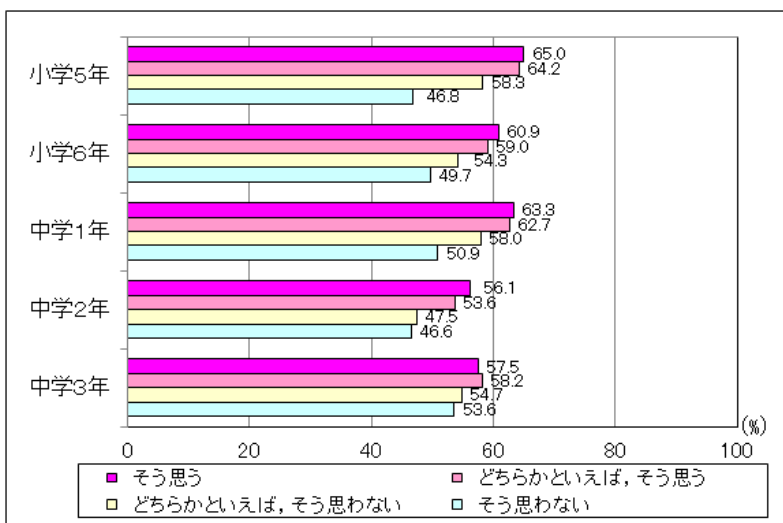


図5 「友達に会うのは楽しい」の回答状況と正答率

回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、小学5年から中学2年までにおいては「そう思う」と回答した児童生徒の平均正答率が最も高くなっている。中学3年においては「どちらかといえば、そう思う」と回答した生徒の平均正答率が最も高くなっている。全ての学年において、友達に会うことに楽しさを感じている児童生徒の方が、楽しさを感じていない児童生徒より平均正答率が高くなっている。[図5]



## ウ 「好きな授業がある」について

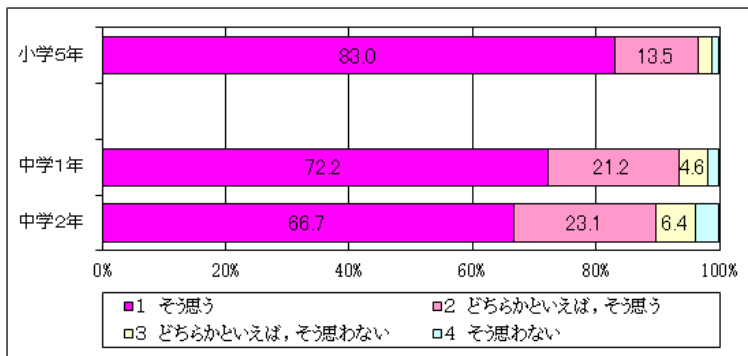


図6 「好きな授業がある」の回答の割合

佐賀県が実施した意識調査の設問「好きな授業がある」において、「そう思う」「どちらかといえば、そう思う」と回答した児童生徒の割合は、小学5年96.5%、中学1年93.4%、中学2年89.8%となり、学年が上がるにつれてその割合が低くなっている。[図6]

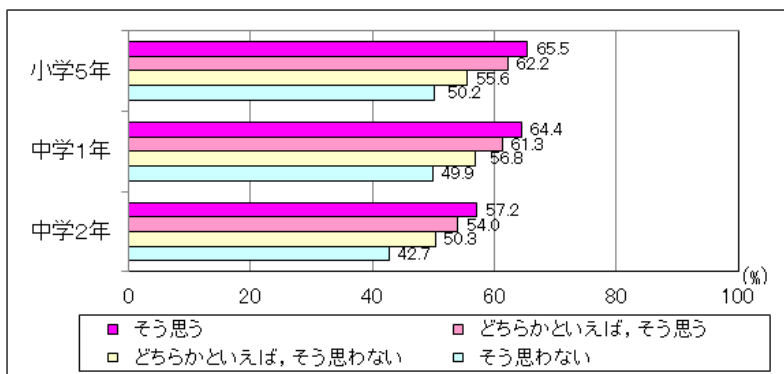


図7 「好きな授業がある」の回答状況と正答率

回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、どの学年においても「そう思う」と回答した児童生徒の平均正答率が最も高くなっている。小学5年と中学1年、中学2年において「そう思う」と回答した児童生徒の平均正答率と「そう思わない」と回答した児童生徒の平均正答率とを比べると14.5ポイント以上の差が見られた。

[図7]

## ○ これからの指導に向けて

## 支持的風土から安心して学習に取り組める環境づくりを

「友達に会うのは楽しい」では、全ての学年において「そう思う」「どちらかといえば、そう思う」と回答した児童生徒の割合は、9割を上回り、平均正答率も高くなっていた。このことから、友達関係と学力の定着については関連があると考えられる。友達同士が、互いに認め合ったり励まし合ったりすることは、安心して学習に取り組める環境へとつながる。この安心して学習に取り組める環境が、学習者同士で互いの考えを安心して伝え合うことにつながるのではないかと考える。安心して考えを伝え合うことは、安心して学び合うことであり、学力の向上へとつながっていくのではないかと考える。そのため、学級経営を基盤とした授業づくりが大切である。

## 達成感や有用感が感じられる授業づくりを

佐賀県が実施した意識調査にある「好きな授業がある」について「そう思う」と回答した児童生徒の平均正答率が最も高くなっており、好きな授業がある児童生徒ほど平均正答率は高くなっていた。このことから、好きな授業があることと学力の定着については関連があると考えられる。授業が好きになるきっかけは児童生徒によって様々である。授業の中で「分かった」「できた」といった達成感を味わわせたり、学んだことを他教科や生活場面に生かすような授業を仕組むことで学んだことを生かせるという有用感を感じさせたりするような授業づくりが大切である。特に、達成感においては、できる限り児童生徒の実態に応じてスモールステップを設定し、「分かった喜び」や「できた喜び」を味わわせていくことが大切になる。

最終更新日：2013-10-21

## 平成25年度佐賀県小・中学校学習状況調査及び全国学力・学習状況調査を活用した調査Web報告書

[Web報告書もくじ](#) > IV 児童生徒意識調査結果の分析

児童生徒意識調査結果の分析

[児童生徒意識調査結果の分析に関わる全てのグラフ](#)

### 2 学習動機

- 全ての学年において、国語や算数、数学の勉強が好きと感じている児童生徒ほど平均正答率は高くなっており、「当てはまらない」と回答した児童生徒の平均正答率よりも9.0ポイント以上の差があった。[図2][図6]
- 小学校、及び中学校において、国語や算数、数学の勉強に対して有用感を感じている児童生徒の割合は、学年が上がるにつれて低くなっていた。[図3][図7]

ここでは、学習への動機について、全ての学年において調査が実施された国語と算数、数学に対する意識と全教科平均正答率との関連から分析を行った。

## ア 「国語の勉強は好きだ」について

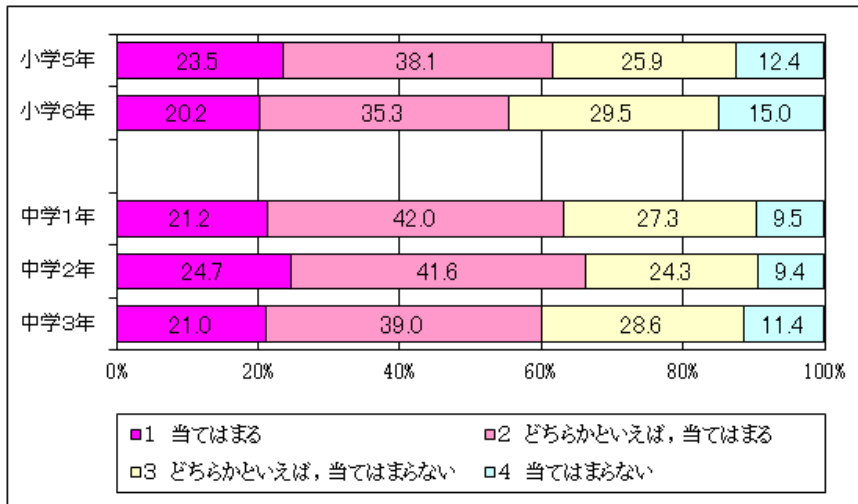


図1 「国語の勉強は好きだ」の回答の割合

「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と回答した児童生徒の割合は、小学5年61.6%、小学6年55.5%、中学1年63.2%、中学2年66.3%、中学3年60.0%であった。全体では、中学2年で最も高い割合を示していた。校種別に見ると、小学6年と中学3年とが最も低い割合を示していた。〔図1〕

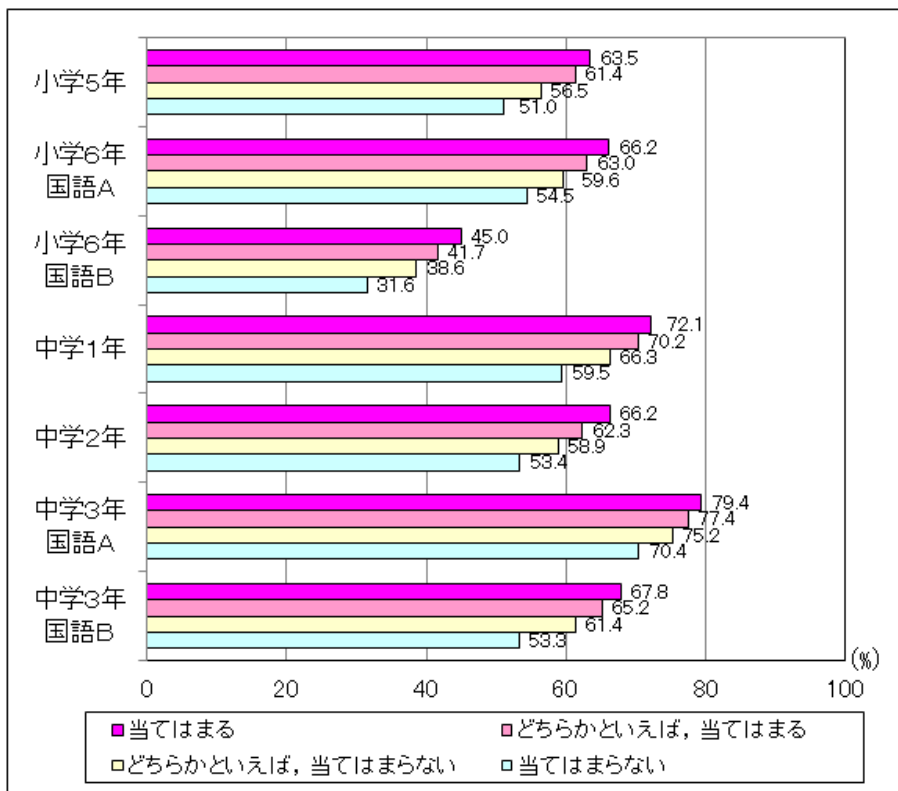


図2 「国語の勉強は好きだ」の回答状況と国語の平均正答率

回答状況と国語の平均正答率との関連を見ると、全ての学年で「当てはまる」と回答した児童生徒の平均正答率が最も高くなっている。「当てはまる」と回答した児童生徒の平均正答率と「当てはまらない」と回答した児童生徒の平均正答率の差を見ると、全ての学年で9.0ポイント以上の差があった。特に、小学6年の国語Bで13.4ポイント、中学3年の国語Bで14.5ポイントであり、他の学年に比べて差が大きかった。〔図2〕

## イ 「国語の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つ」について

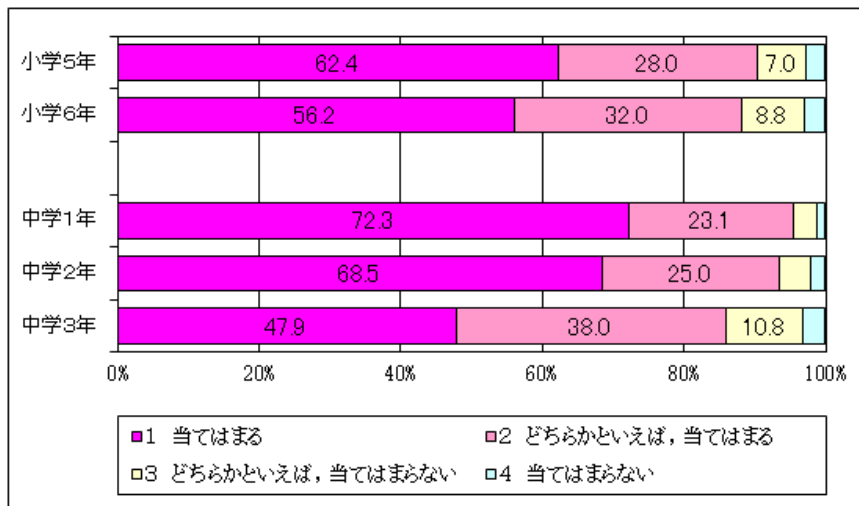


図3 「国語の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つ」の回答の割合

「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と回答した児童生徒の割合は、小学5年90.4%、小学6年88.2%、中学1年95.4%、中学2年93.5%、中学3年85.9%であった。特に、中学1年において95%を上回る割合を示していた。校種別に見ると、学年が上がるにつれて「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」と回答した児童生徒の割合は低くなっている。[図3]

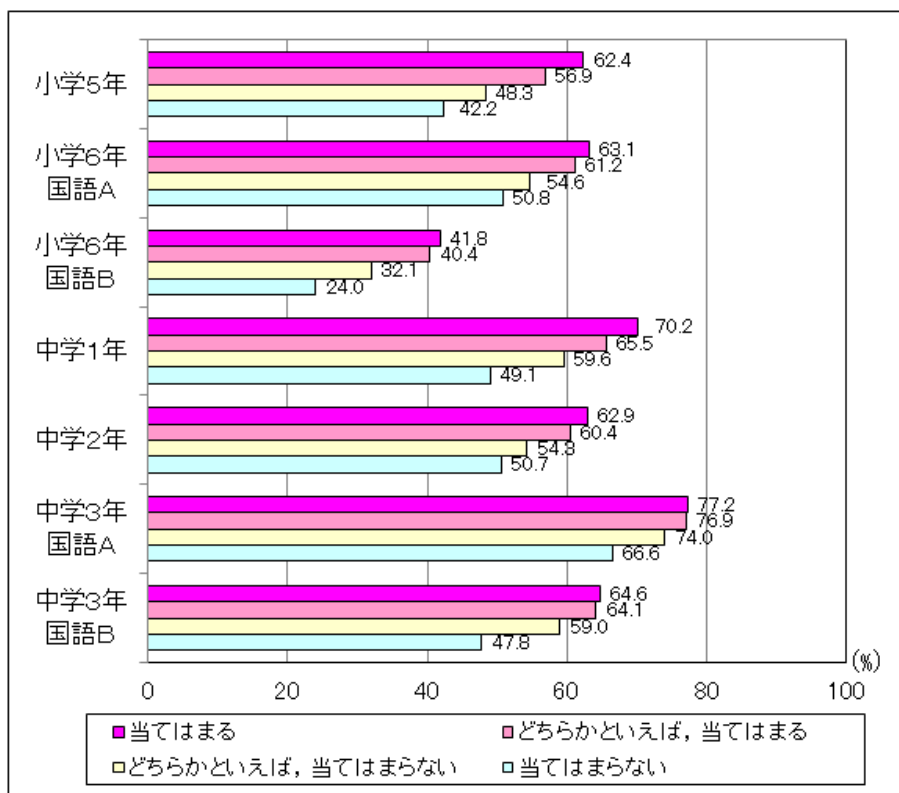


図4 「国語の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つ」の回答状況と国語の平均正答率

回答状況と国語の平均正答率との関連を見ると、全ての学年で「当てはまる」と回答した児童生徒の平均正答率が最も高くなっている。「当てはまる」と回答した児童生徒の平均正答率と「当てはまらない」と回答した児童生徒の平均正答率の差を見ると、全ての学年で10.0ポイント以上の差があった。特に、小学5年と中学1年の国語は20.0ポイント以上の差があり、他の学年に比べて差が大きかった。[図4]

## ウ 「算数(数学)の勉強は好きだ」について

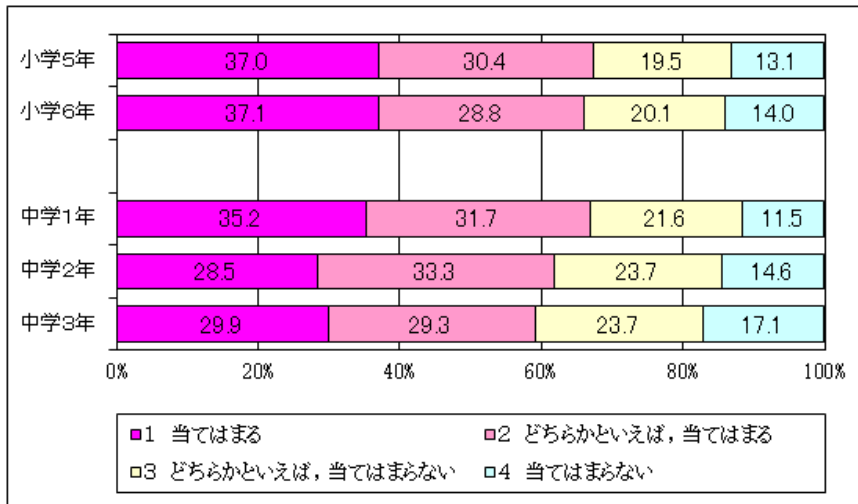


図5 「算数(数学)の勉強は好きだ」の回答の割合

「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と回答した児童生徒の割合は、小学5年67.4%、小学6年65.9%、中学1年66.9%、中学2年61.8%、中学3年59.2%であった。校種別に見ると、学年が上がるにつれて「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」と回答した児童生徒の割合は低くなっている。[図5]

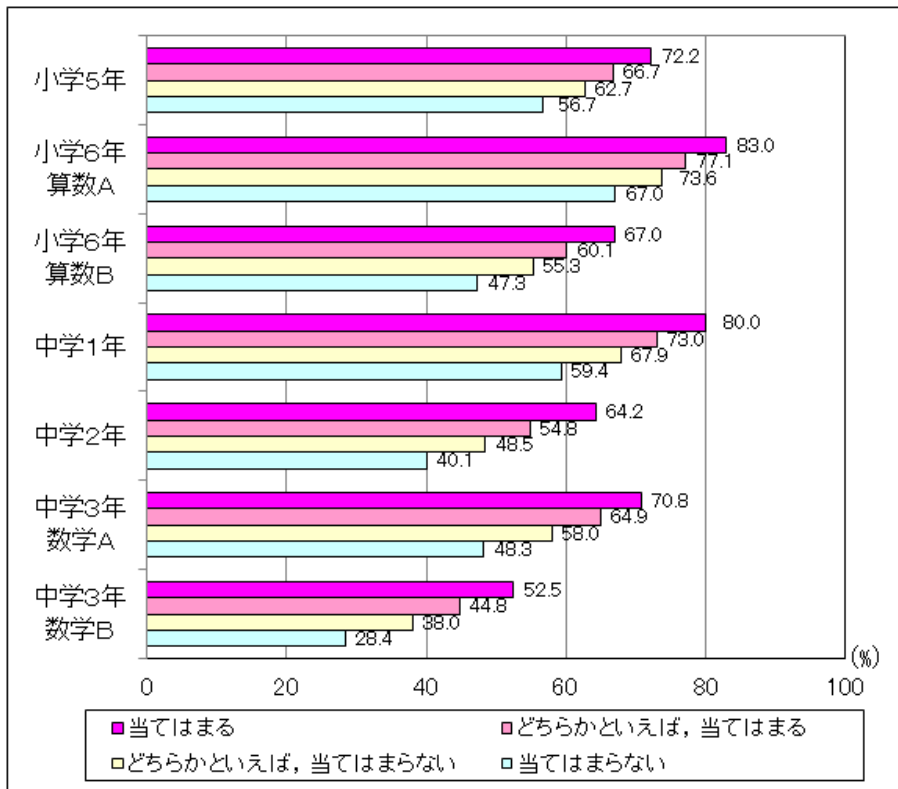


図6 「算数(数学)の勉強は好きだ」の回答状況と算数(数学)の平均正答率

回答状況と算数(数学)の平均正答率との関連を見ると、全ての学年で「当てはまる」と回答した児童生徒の平均正答率が最も高くなっている。「当てはまる」と回答した児童生徒の平均正答率と「当てはまらない」と回答した児童生徒の平均正答率の差を校種別に見ると、小学校では15.5ポイント以上、中学校では20.6ポイント以上の差があった。[図6]

## エ 「算数(数学)の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つ」について

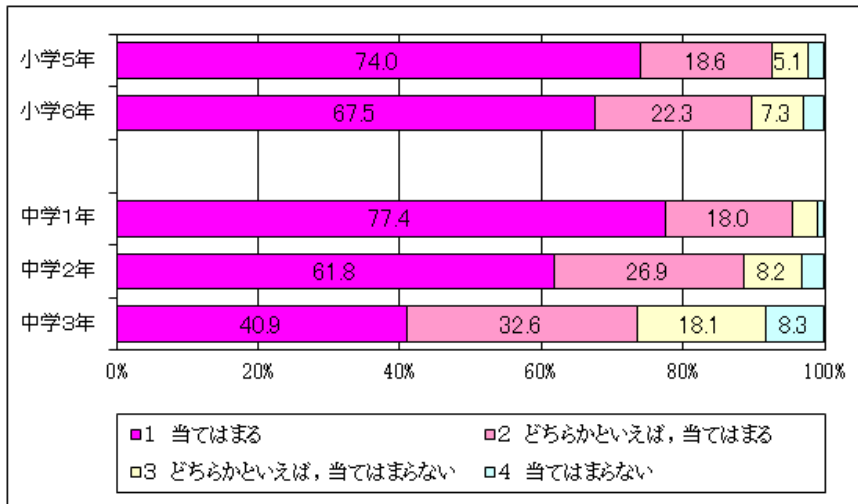


図7 「算数(数学)の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役立つ」の回答の割合

「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と回答した児童生徒の割合は、小学5年92.6%、小学6年89.8%、中学1年95.4%、中学2年88.7%、中学3年73.5%であった。校種別に見ると、学年が上がるにつれて「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」と回答した児童生徒の割合は低くなっている。[図7]

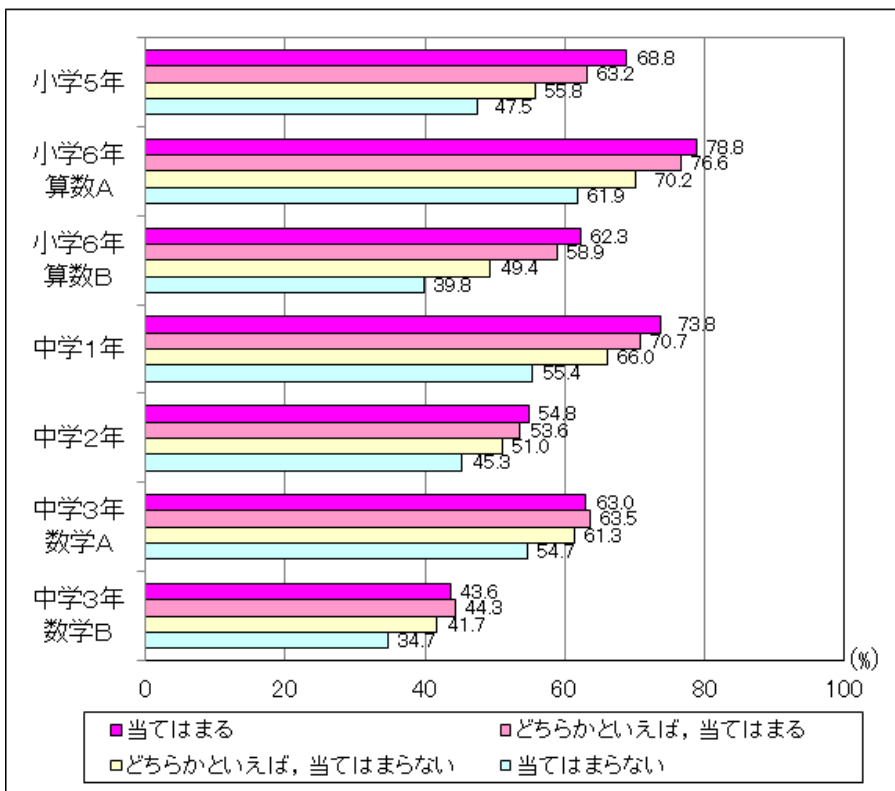


図8 「算数(数学)の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役立つ」の回答状況と算数(数学)の平均正答率

回答状況と算数(数学)の平均正答率との関連を見ると、小学5年から中学2年までにおいては「当てはまる」と回答した児童生徒の平均正答率が最も高くなっている。中学3年においては「どちらかといえば、当てはまる」と回答した生徒の平均正答率が最も高くなっている。全ての学年において、学習したことの有用感を感じている児童生徒の方が、有用感を感じていない児童生徒より平均正答率が高くなっている。[図8]

## ○ これからの指導に向けて

### 他教科や日常生活とのつながりを意識させる授業づくりを

各教科の学習が好きになる理由は、児童生徒によって様々である。好きになる理由の1つに、各教科の学習が「他教科や日常生活に生かせる」「将来役立つ」などの有用感がある。この有用感は、児童生徒にとって学習する必然性となり、学習に対する意欲へとつながっていくと考える。そこで、学習課題(学習問題)を日常生活から設定したり、他教科において学習した内容を生かさせるような声かけをしたりすることで、学習したことが他教科や日常生活と結び付いていることを意識付けることが大切である。単元の終末では、日常生活に結び付くような学習を仕組むことで学習した内容を日常生活の中で生かしていこうとする意欲をもたせていくことも大切である。

最終更新日:2013-10-21

## 平成25年度佐賀県小・中学校学習状況調査及び全国学力・学習状況調査を活用した調査Web報告書

Web報告書もくじ > IV 児童生徒意識調査結果の分析

### 児童生徒意識調査結果の分析

[児童生徒意識調査結果の分析に関わる全てのグラフ](#)

#### 3 学習活動(教科全般)

- 普段の授業で自分の考えを発表する機会は、平成23年度からの経年で比較すると年々増加しており、発表する機会が与えられている児童生徒ほど、全教科平均正答率は高くなっていた。[図1][図2]
- 学校の授業などで自分の考えを表現することに対して難しいと感じている児童生徒は、平成23年度からの経年で比較すると年々減少しており、表現することに難しさを感じている児童生徒ほど、全教科平均正答率は低くなっていた。[図3][図4]

ここでは、教科全般における学習活動について、自分の考えを発表する機会と自分の考えを表現することに対する意識の変容を平成23年度からの調査結果と比較し、分析を行った。また、平成25年度の調査結果と全教科平均正答率との関連からも分析を行った。



## ア 「普段の授業では、自分の考えを発表する機会があたえられていると思う」についての経年比較(同一学年)

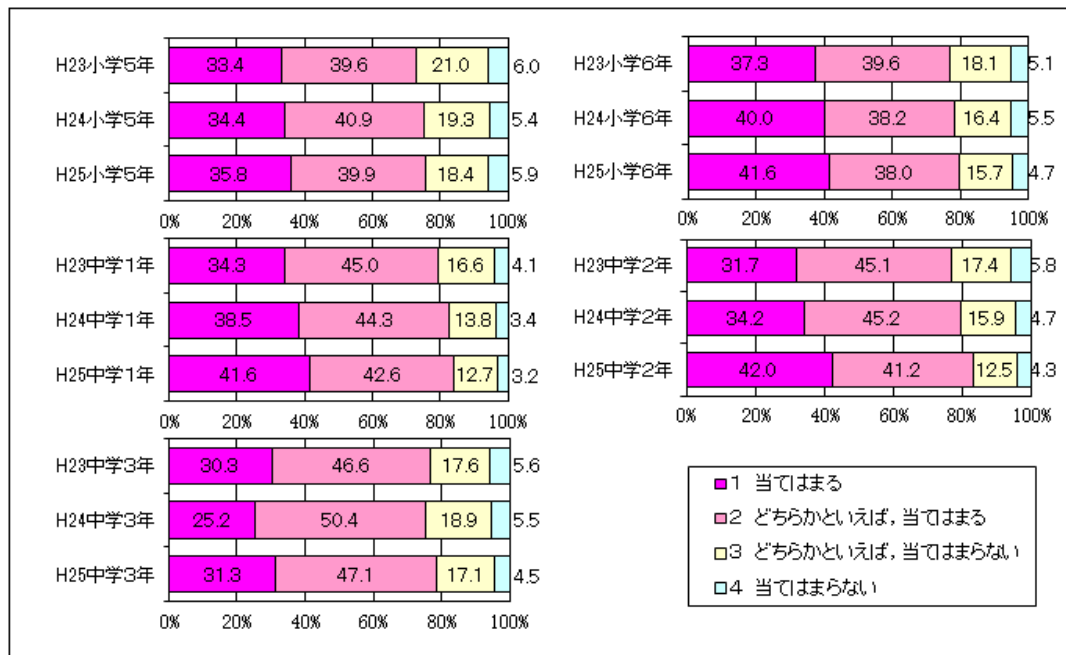


図1 「普段の授業では、自分の考えを発表する機会があたえられていると思う」の回答の割合の経年比較

平成25年度の調査において「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」と回答した児童生徒の割合は、小学5年75.7%、小学6年79.6%、中学1年84.2%、中学2年83.2%、中学3年78.4%となり、全ての学年において7割を上回る結果となった。同一学年において「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」と回答した児童生徒の割合を、平成23年度からの経年で比較すると、小学5年から中学2年までは徐々に高くなっている。中学3年においては、平成23年度と比べると1.5ポイント高くなっている。[図1]

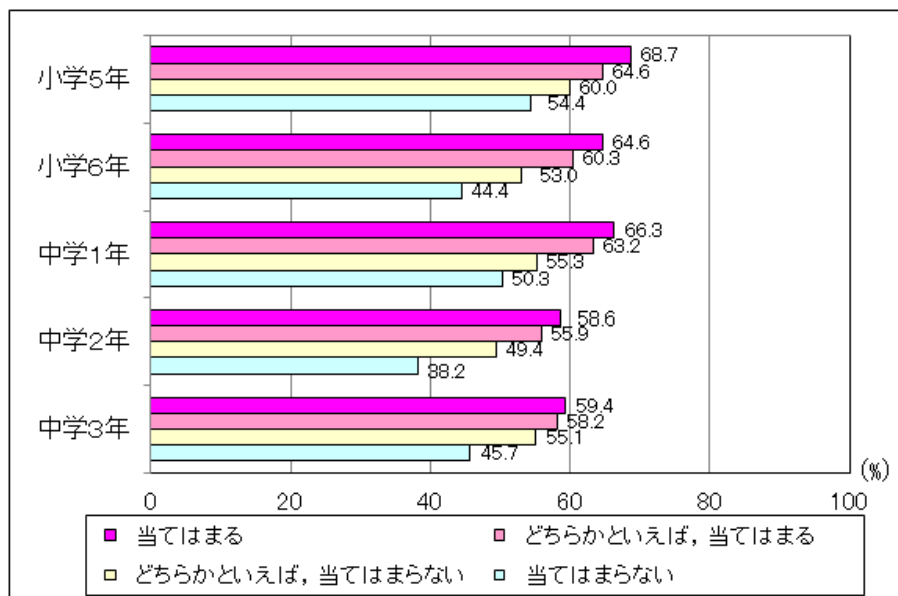


図2 「普段の授業では、自分の考えを発表する機会があたえられていると思う」の回答状況と全教科平均正答率(平成25年度)

回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、全ての学年において「当てはまる」と回答した児童生徒の平均正答率が最も高くなっている。「当てはまる」と回答した児童生徒の平均正答率と「当てはまらない」と回答した児童生徒の平均正答率とを比較すると、全ての学年において10.0ポイント以上の差があった。[図2]

## イ 「学校の授業などで、自分の考えをほかの人に説明したり、文章に書いたりするのは難しい」についての経年比較(同一学年)

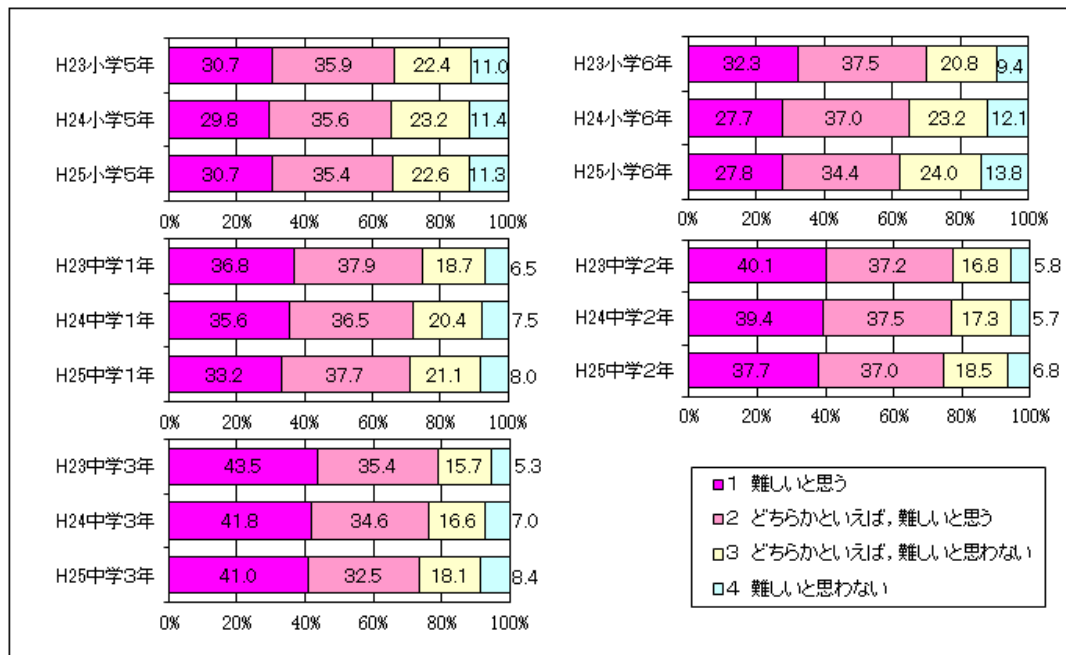


図3 「学校の授業などで、自分の考えをほかの人に説明したり、文章に書いたりするのは難しい」の回答の割合の経年比較

平成25年度の調査において「難しいと思う」「どちらかといえば、難しいと思う」と回答した児童生徒の割合は、小学5年66.1%、小学6年62.2%、中学1年70.9%、中学2年74.7%、中学3年73.5%となっている。同一学年において「難しいと思う」「どちらかといえば、難しいと思う」と回答した児童生徒の割合を、平成23年度からの経年で比較すると、小学6年から中学3年までは年々低くなってきており、難しさを感じる児童生徒が少なくなっていることがうかがえる。小学5年においては、変化が見られなかった。[図3]

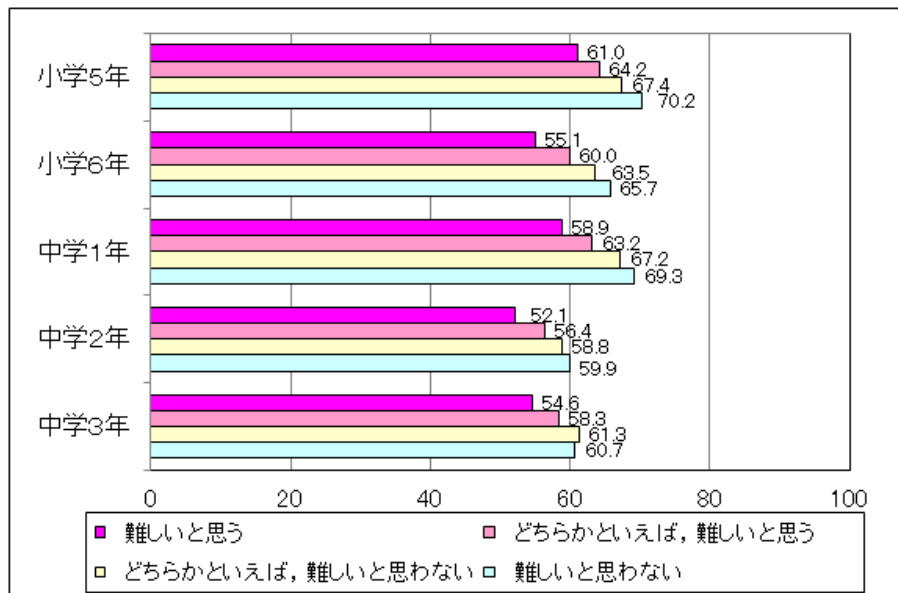


図4 「学校の授業などで、自分の考えを他の人に説明したり、文章に書いたりするのは難しい」の回答状況と全教科平均正答率(平成25年度)

回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、「難しいと思う」と回答した児童生徒の平均正答率が最も低くなっており、小学5年から中学3年までにおいては、難しさを感じている児童生徒より感じていない児童生徒の方の平均正答率が高くなる結果であった。[図4]

## ○ これからの指導に向けて

### 自分の考えと他者の考えを比較する場の設定を

普段の授業の中で、児童生徒が自分の考えを発表する機会は、年々増加してきていることがうかがえた。自分の考えを発表し交流する活動は、自分の考えと他者の考えとを比較する活動であり、児童生徒の思考力・判断力・表現力等を育成していく上で大切な活動である。考えを発表する場では、聞き手に相似点や相違点を考えながら聞かせたり、発表者に相似点や相違点を示しながら発表させたりするなどの工夫も大切である。

### 自分の考えを記述する活動を

自分の考えを表現することへの抵抗感は、年々和らいできていることがうかがえた。このことから、自分の考えを表現するための指導改善が図られてきたことがうかがえる。しかしながら、依然として小学校においては6割を上回る割合で、中学校においては7割を上回る割合で自分の考えを表現することに対して難しさを感じている。

そこで、自分の考えを文章に書いて表現する活動に着目したい。自分の考えを文章に書いて表現する活動は、自分の考えを整理することにつながるだけでなく、自分の考えを明確にする効果も期待できる。そればかりでなく、文章に書き表したことで、自分の考えを他の人に説明もしやすくなるを考える。自分の考えを発表させる際や、学級またはグループで考えを交流させる際には、まず自分の考えを文章に書かせた上で行うことが効果的ではないかと考える。そのためにも、自分の考えを書き表すための指導を丁寧にしていくことが大切である。

最終更新日:2013-10-21

## 平成25年度佐賀県小・中学校学習状況調査及び全国学力・学習状況調査を活用した調査Web報告書

Web報告書もくじ> IV 児童生徒意識調査結果の分析

### 児童生徒意識調査結果の分析

#### 児童生徒意識調査結果の分析に関わる全てのグラフ

#### 4 家庭学習

- 1日あたりの学習時間について、小学校では、1時間以上学習している児童の割合が年々高くなっており、中学校では、中学1年と中学3年とで2時間以上学習している生徒の割合が年々高くなっていった。[図1]
- 自分で計画を立てて勉強する児童生徒の割合に大きな変化は見られないが、計画を立てて勉強する児童生徒ほど、全教科平均正答率は高くなっていった。[図5][図6]

ここでは、家庭での学習状況について、普段の学習時間と計画的な学習の変容を平成23年度からの調査結果と比較し、分析を行った。また、平成25年度の調査結果と全教科平均正答率との関連からも分析を行った。学校の宿題については、平成25年度の回答の割合と全教科平均正答率との関連から分析を行った。

#### ア 「学校の授業時間以外に、普段(月曜日から金曜日)、1日あたりどれくらいの時間、勉強しますか」についての経年比較(同一学年)

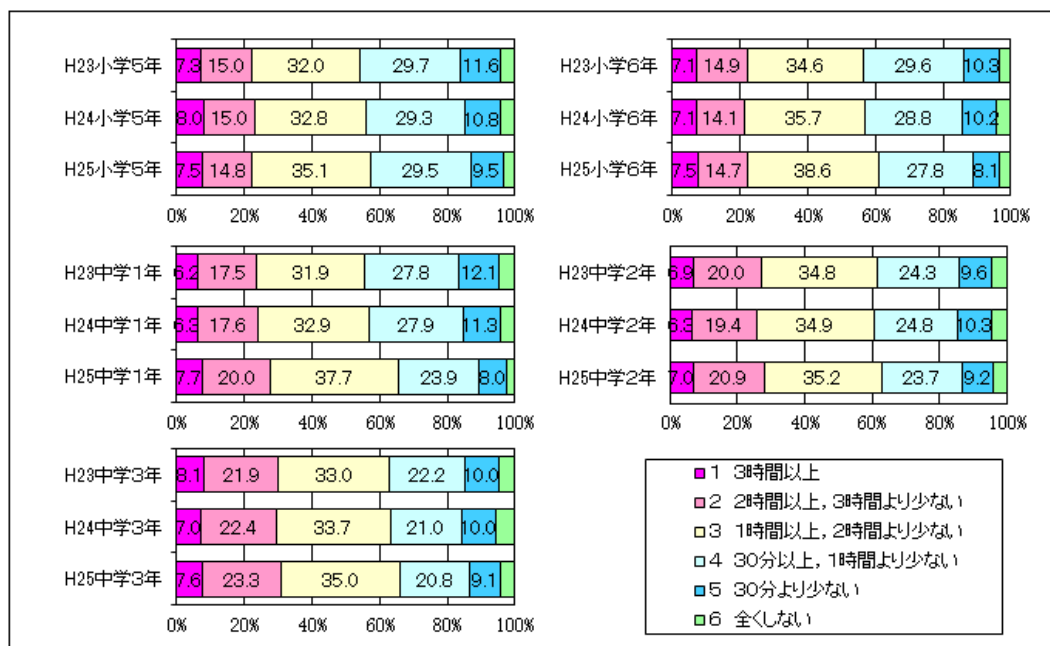


図1 「学校の授業時間以外に、普段、1日あたりどれくらいの時間、勉強しますか」の回答の割合の経年比較

平成25年度の調査を見ると、全ての学年において「1時間以上、2時間より少ない」と回答した児童生徒の割合が最も高く、35%を上回っていた。同一学年において、1時間より少ないと回答した児童生徒の割合を、平成23年度からの経年で比較すると、全ての学年において、学校の授業以外での学習時間は増加してきている。[図1]

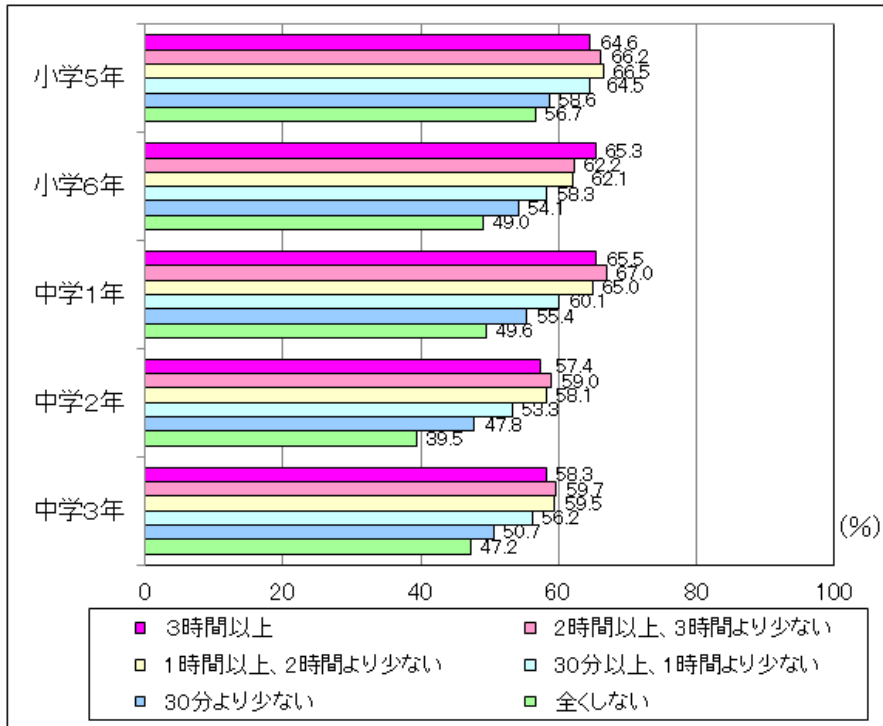


図2 「学校の授業時間以外に、普段、1日あたりどれくらいの時間、勉強しますか」の回答状況と度全教科平均正答率(平成25年度)

回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、全ての学年において、1時間以上学習している児童生徒の平均正答率の方が、1時間より少ない時間学習している児童生徒の平均正答率よりも高い正答率であった。1時間以上学習していると回答した児童生徒の平均正答率を選択肢ごとに見てみると、時間が長いほど平均正答率が高いとは言えない結果であった。[図2]

## イ 「自分で計画を立てて勉強している」についての経年比較(同一学年)

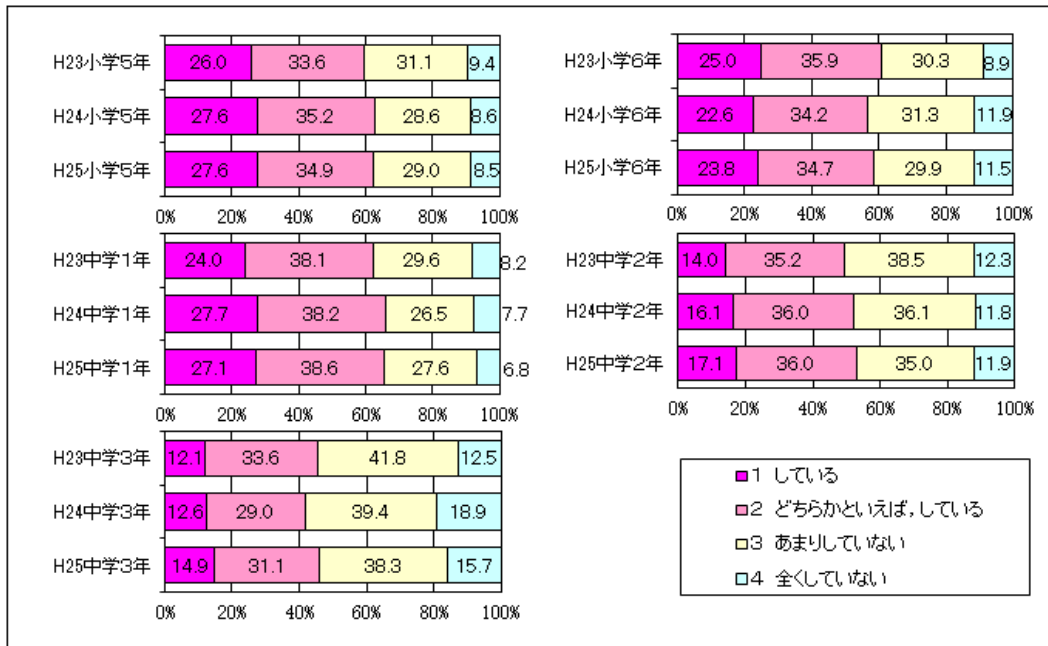


図3 「自分で計画を立てて勉強している」の回答の割合の経年比較

平成25年度の調査において「している」「どちらかといえば、している」と回答した児童生徒の割合は、小学5年62.5%、小学6年58.5%、中学1年65.7%、中学2年53.1%、中学3年46.0%であり、中学2年生が最も高い割合であった。同一学年において「している」「どちらかといえば、している」と回答した児童生徒の割合を、平成23年度からの経年で比較すると、全ての学年においてははっきりとした傾向は見られなかったが、中学2年においてその割合は徐々に高くなっていった。[図3]

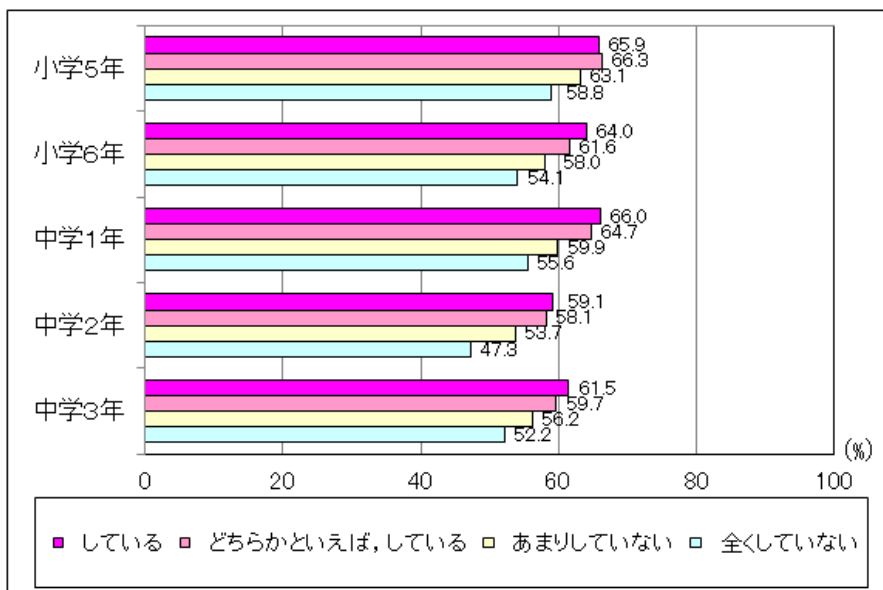


図4 「自分で計画を立てて勉強している」の回答状況と全教科平均正答率(平成25年度)

回答状況と全教科平均正答率との関連をみると、小学6年から中学3年までにおいて「している」と回答している児童生徒の平均正答率が最も高くなっていった。小学5年においては、自分で計画を立てて勉強している児童の平均正答率の方が、計画を立てて勉強していない児童の平均正答率に比べて高くなっていった。「している」と回答した児童生徒の平均正答率と、「全くしていない」と回答した児童生徒の平均正答率との差を見ると、全ての学年において7.0ポイント以上の差があった。特に、中学2年では、11.8ポイントあり最も大きかった。

[図4]

## ○ これからの指導に向けて

### 家庭との連携を図り、家庭学習の定着を

普段、学校の授業以外に学習している時間について、平成23年度からの経年で比較すると、小学校では、1時間以上勉強している児童の割合は年々高くなっていった。中学校において2時間以上勉強している生徒の割合は、どの学年も平成23年度と比較して高い割合であった。一方、学習時間と全教科平均正答率との関連を見ると、長い時間勉強している児童生徒が必ずしも平均正答率が高いとは限らない結果となった。学校によっては、年度当初に家庭学習について記した手引きを配付し、学習の時間や学習への取り組み方、学習の内容等を示しながら家庭学習の定着に取り組んでいる。その際、学習への取り組み方について「テレビを消して」や「机の回りを整理して」など学習に集中できる環境作りを示している学校もある。このような取組は、児童生徒が集中して学習に取り組む上で大切なことと考える。今後も、家庭での学習環境にも目を向け、家庭と連携を図りながら指導していくことが大切である。

家庭学習への意識を定着させるためには、年度当初に示すだけでなく、定期的に意識付けを図る必要がある。意識付けを図る方法の1つとして、児童生徒やその保護者を対象とした意識調査を行うことが考えられる。意識調査を定期的に行っていくことで、児童生徒に家庭学習の状況を振り返らせながら意識の定着を図るだけでなく、その保護者に対しても家庭での児童生徒の学習状況について考えてもらう機会としたい。

### 家庭での過ごし方に計画性を

計画的に勉強を進めている児童生徒の割合を平成23年度からの経年で比較すると、はっきりとした傾向は見られなかったものの、全教科平均正答率を見ると、計画的に勉強を進めている児童生徒ほど平均正答率が高くなっていった。このことから、学習時間を延ばすことも大切であるが、限られた時間をどのように活用していくかについて児童生徒に考えさせることも大切であるとする。1日の過ごし方や1週間の過ごし方について考えさせる時間を学校または家庭で確保し、計画的な過ごし方を意識させ、効率のよい学習習慣を身に付けさせることが大切である。

最終更新日：2013-10-21

# 平成25年度佐賀県小・中学校学習状況調査及び全国学力・学習状況調査を活用した調査Web報告書

Web報告書もくじ> IV 児童生徒意識調査結果の分析

## IV 児童生徒意識調査結果の分析

### 児童生徒意識調査結果の分析に関わる全てのグラフ

#### 5 生活習慣等

- 読書をする時間は、学年が上がるに従って短くなっており、平成23年度からの経年で比較してもはっきりとした傾向は見られなかった。[図1]
- 普段テレビ等を視聴する時間は、平成23年度からの経年で比較をすると、小学5年、中学1年、中学2年、中学3年において2時間以上視聴している児童生徒の割合が年々低下していた。[図3]
- 普段テレビゲームを1時間以上する児童生徒の割合は、全ての学年で5割を下回っていたが、その割合は、平成23年度と比較して高くなっていた。テレビゲームをする時間が長い児童生徒ほど平均正答率は低くなっていた。[図5][図6]

ここでは、家庭での生活習慣について、読書をする時間やテレビを見る時間、ゲームをする時間といった家庭での過ごし方を平成23年度からの調査結果と比較し、分析を行った。また、平成25年度の調査結果と全教科平均正答率との関連からも分析を行った。

ア 「家や図書館で、普段(月曜日から金曜日)、1日あたりどれくらいの時間、読書をしますか(教科書や参考書、漫画や雑誌は除きます。)」についての経年比較(同一学年)

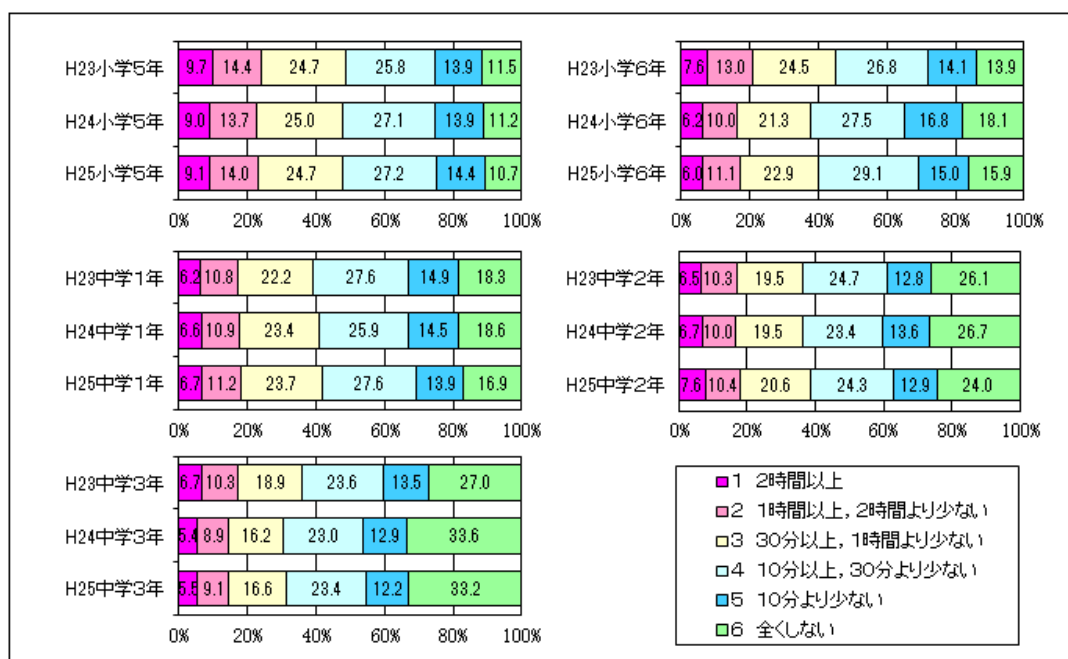


図1 「家や図書館で、普段、1日あたりどれくらいの時間、読書をしますか」の回答の割合の経年比較

平成25年度の調査を見ると、全ての学年において「10分以上、30分より少ない」と回答した児童生徒の割合が最も高かった。「全くしない」と回答した児童生徒の割合を見ると、学年が上がるに従ってその割合は高くなっていた。特に、中学3年においては33.2%と最も高くなっていた。平成23年度からの経年で比較すると、全ての学年においてははっきりとした傾向は見られなかったが、学年が上がるにつれて読書をする時間が減る傾向にあることには変わりなかった。[図1]



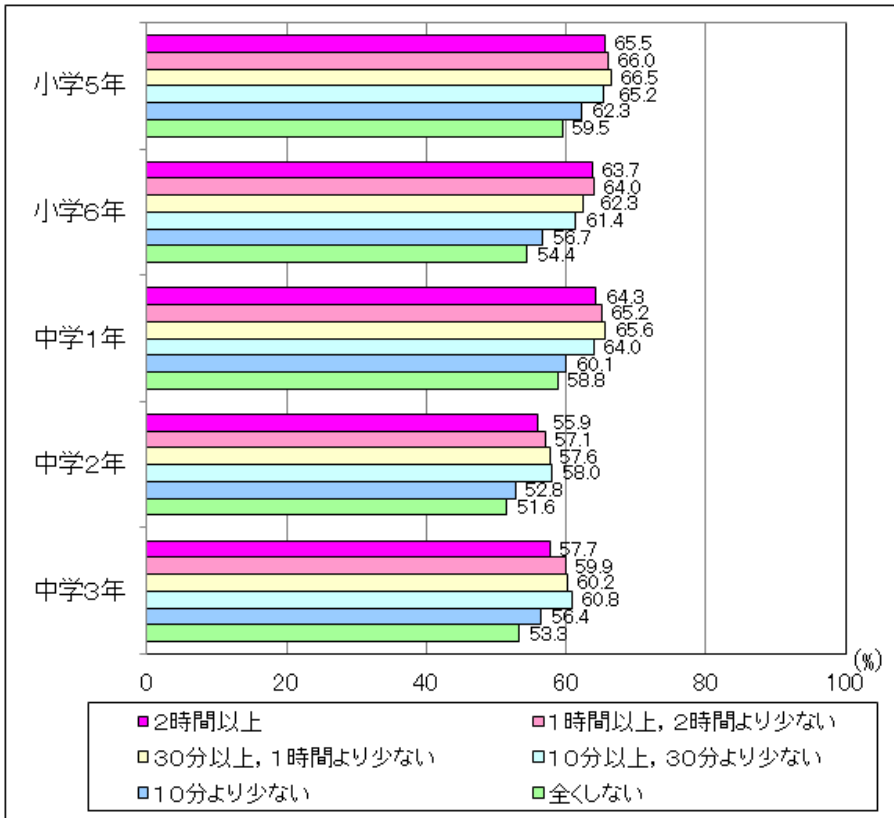


図2 「家や図書館で、普段、1日あたりどれくらいの時間、読書をしますか」の回答状況と全教科平均正答率(平成25年度)

回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、10分以上読書している児童生徒の平均正答率の方が、10分より少ない時間読書をしている、または全く読書をしていない児童生徒の平均正答率よりも高い結果となった。10分以上読書している児童生徒の平均正答率を選択肢別に見ると、はっきりとした傾向は見られなかった。[図2]

イ 「普段(月曜日から金曜日)、1日あたりどれくらいの時間、テレビやビデオ・DVDを見たり、聞いたりしますか」についての経年比較(同一学年)

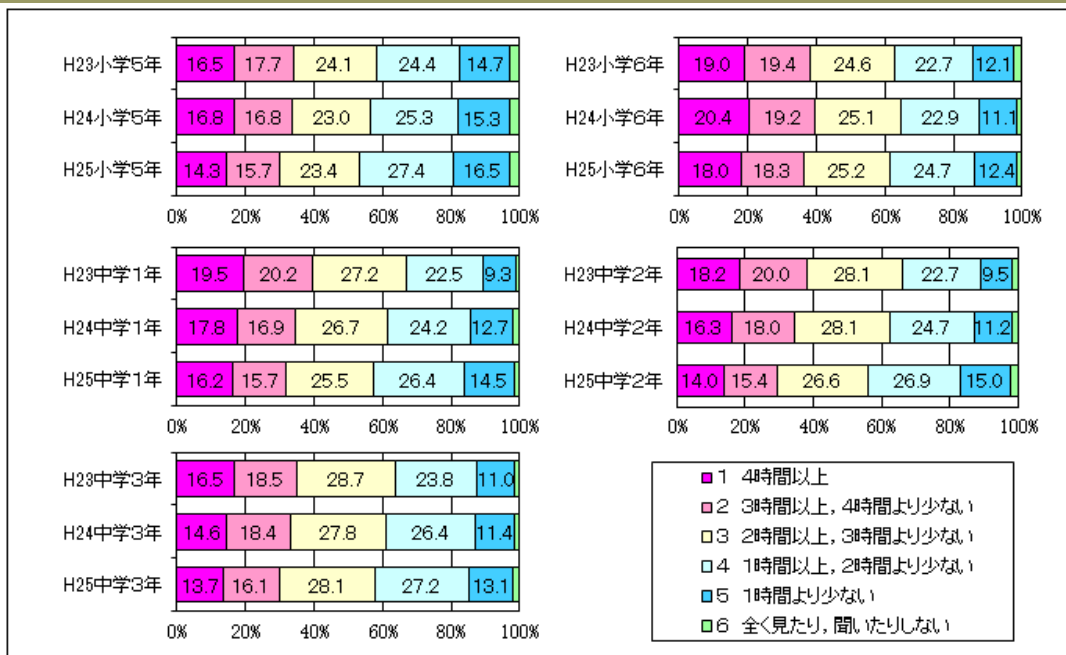


図3 「普段、1日あたりどれくらいの時間、テレビやビデオ・DVDを見たり、聞いたりしますか」の回答の割合の経年比較

平成25年度の調査結果を見ると、小学5年と中学1年、中学2年では「1時間以上、2時間より少ない」と回答した児童生徒の割合が最も高く、小学5年27.4%、中学1年26.4%、中学2年26.9%であった。小学6年と中学3年では「2時間以上、3時間より少ない」と回答した児童生徒の割合が最も高く、小学6年25.2%、中学3年28.1%であった。平成23年度からの経年で比較すると、小学5年、中学1年、中学2年、中学3年において、1時間以上テレビやビデオ、DVDを視聴している児童生徒の割合が低くなってきた。小学6年においては、1時間以上視聴している児童の割合は、平成24年度と比較して0.6ポイント下回る結果であり、2時間以上視聴している児童の割合を見ると、3年間で最も低い割合であった。[図3]

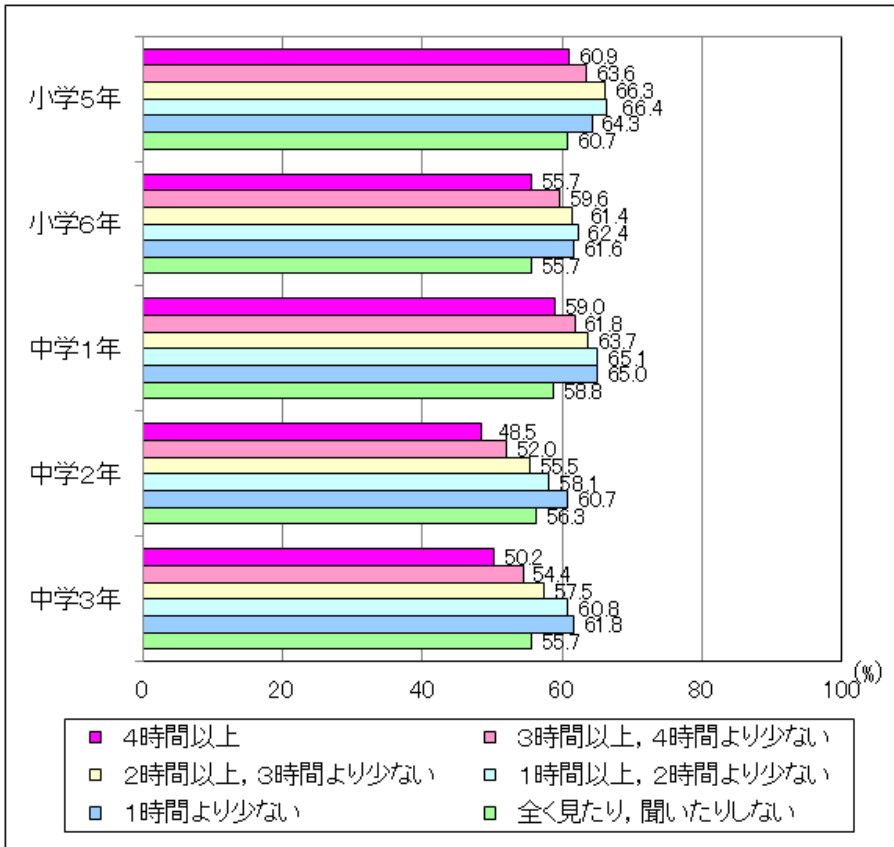


図4 「普段、1日あたりどれぐらいの時間、テレビやビデオ・DVDを見たり、聞いたりしますか」の回答状況と全教科平均正答率(平成25年度)

回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、小学校では、「1時間以上、2時間より少ない」と回答した児童の平均正答率が高くなっていた。中学校では、「2時間以上、3時間より少ない」と回答した生徒の平均正答率が高くなっていた。また、小学校、中学校共に、「4時間以上」「全く見たり、聞いたりしていない」と回答した児童生徒の平均正答率が低くなっていた。

[図4]

ウ 「普段(月曜日から金曜日)、1日あたりどれくらいの時間、テレビゲーム(コンピュータゲーム、携帯式のゲームをふくみます。)をしますか」について

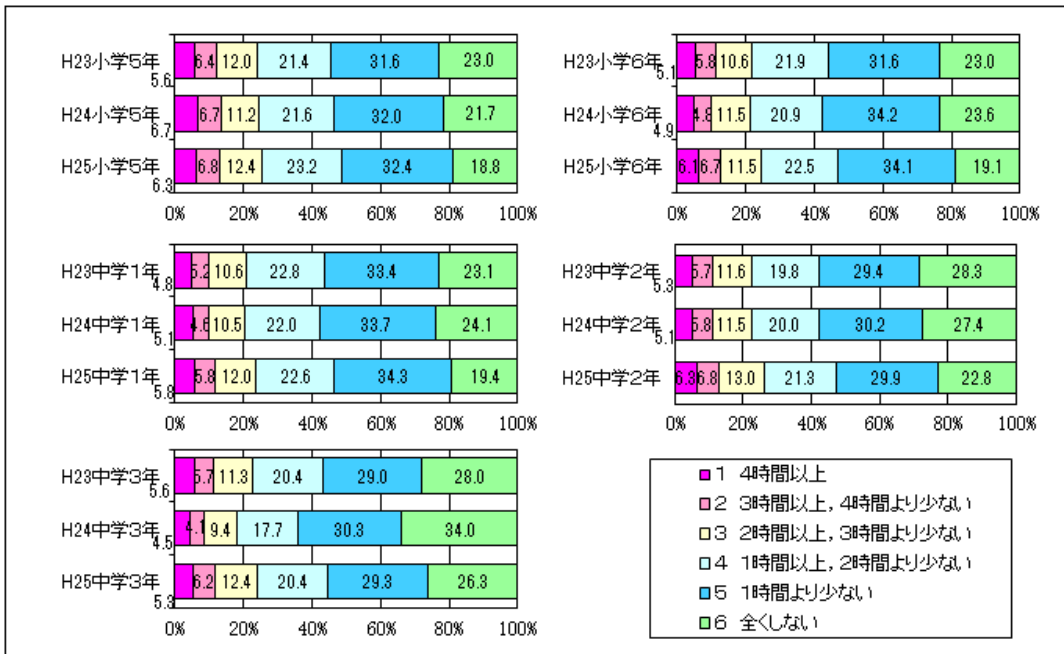


図5 「普段、1日あたりどれくらいの時間、テレビゲームをしますか」の回答の割合の経年比較

平成25年度の調査結果を見ると、全ての学年において「1時間より少ない」と回答している児童生徒の割合が最も高く、小学5年32.4%、小学6年34.1%、中学1年34.3%、中学2年29.9%、中学3年29.3%となっており、小学校、中学校ともに、学年が上がるとテレビゲームをする時間が減少する結果であった。同一学年において、「1時間より少ない」「全くしない」と回答した児童生徒の割合を、平成23年度からの経年で比較すると、小学5年と中学2年において徐々に低くなってきていた。小学6年と中学1年、中学3年においては、平成23年度と比べて低くなっており、3年間の中で最も低い割合であった。[図5]

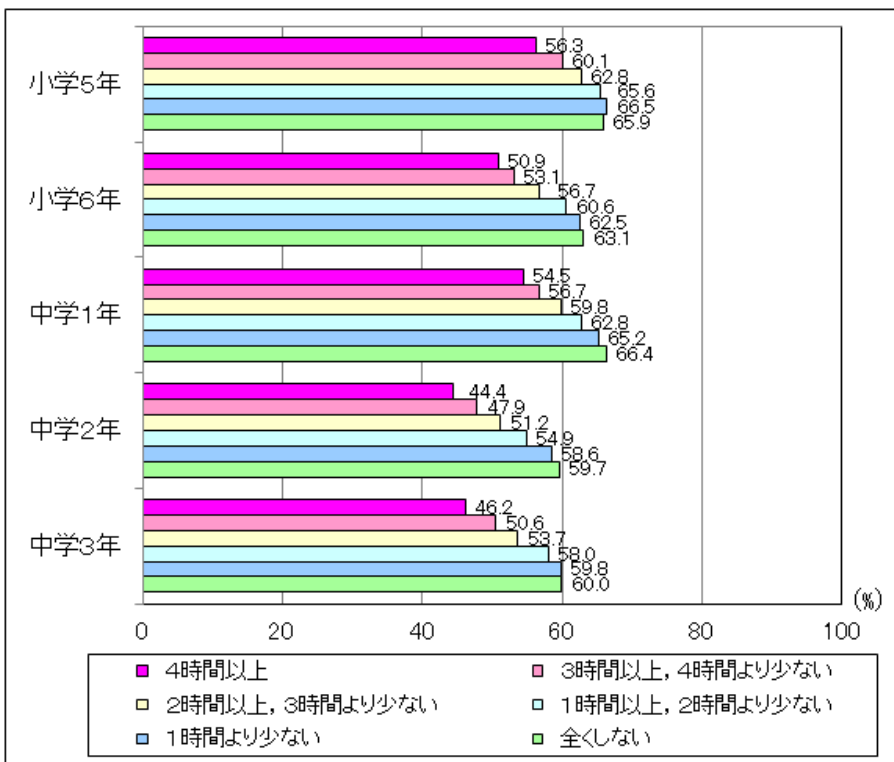


図6 「普段、1日あたりどれくらいの時間、テレビゲームをしますか」の回答状況と全教科平均正答率(平成25年度)

回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、小学5年では、「1時間より少ない」と回答した児童の平均正答率が最も高く66.5であった。他の学年では、「全くしない」と回答した児童生徒の平均正答率が最も高く、小学6年63.1、中学1年66.4、中学2年59.7、中学3年60.0であった。全ての学年においてテレビゲームをする時間が長くなるにしたがって、平均正答率は低くなっていった。[図6]

## ○ 今後の指導に向けて

### 学校、家庭、地域が一体となって読書をする習慣を

平成22年12月に国立教育政策研究所から公表された「PISA2009の課題を受けた今後の取組」の中で、「子どもの読書活動の推進」として「家庭、地域、学校における取組の一体的推進」を掲げている。そこで、学校以外での読書の時間と全教科平均正答率との関連を見てみると、10分以上読書をしている児童生徒の平均正答率の方が10分より少ない時間読書をしている児童生徒、または、全く読書をしていない児童生徒の平均正答率よりも高い正答率であった。このことから、適度な時間、読書をすることが学力の向上によい影響を与えていることがうかがえる。しかしながら、平成23年度からの経年比較を見てみると、どの学年においても読書をする時間が短くなる傾向がうかがえた。家庭での読書活動については、これまでも「親子で読書」や「家読(家庭での読書)」といった家庭と連携を図った学校独自の取組を行ってきた。これからもこのような取組を継続しつつ、地域で行われる読み聞かせ活動を紹介したり、読み聞かせボランティアを活用したりするなど、家庭や地域とより一層連携を図りながら読書をする習慣を身に付けさせることが大切である。

### 家庭との連携を図り、計画的な過ごし方を

テレビ等を視聴する時間と全教科平均正答率との関連を見ると、「1時間以上、2時間より少ない」と回答した児童生徒の平均正答率が高くなっていた。テレビゲームをする時間については、平成23年度からの経年で見ると、1時間以上テレビゲームをしている児童生徒の割合は、3年間の中で最も低くなっていた。テレビゲームをする時間が長くなるほど、平均正答率は低くなっており4時間以上テレビゲームをしている児童生徒と全くテレビゲームをしない児童生徒の平均正答率を比べると、全ての学年で9.0ポイント以上の差があった。家庭での過ごし方についても学習と同様に、計画性をもたせる必要がある。学校外での過ごし方について計画を立てさせることで、児童生徒にこれまでの過ごし方を振り返らせると共に、家庭でのよりよい過ごし方について考えさせることも大切である。

最終更新日: 2013-10-21

# 平成25年度佐賀県小・中学校学習状況調査及び全国学力・学習状況調査を活用した調査Web報告書

Web報告書もくじ> IV 教師意識調査結果の分析

## 教師意識調査結果の分析

[教師意識調査の全てのグラフ\(Ⅱ 教師像共通グラフへ\)](#)

### 1 教科全般における指導法の工夫

- 小学校、中学校共に、レポートや作文、発表や話し合いなどの言語活動を取り入れる教師の割合が高くなってきている。[図1、図3]
- 小学校、中学校共に、日常の授業や指導などにおいてPDCAサイクルを意識し、単元における学習目標や評価基準を明確にしたり、目標を達成するために必要な教材や学習活動を指導計画に取り入れたりしている教師の割合が高くなってきている。[図5、図6]

ここでは、教科全般における指導法の工夫について、書いて表現する活動を取り入れた授業、考えを交流する活動を取り入れた授業、指導と評価を一体とした授業、PDCAサイクルを踏まえた実践の実施状況について分析する。

なお、学校スコアによるグループ比較においては、小学校、中学校の最高学年である小学6年生と中学3年生の結果を基に比較することとする。

## ア 「レポートや作文など書いて表現する活動を取り入れた授業を行っていますか」について

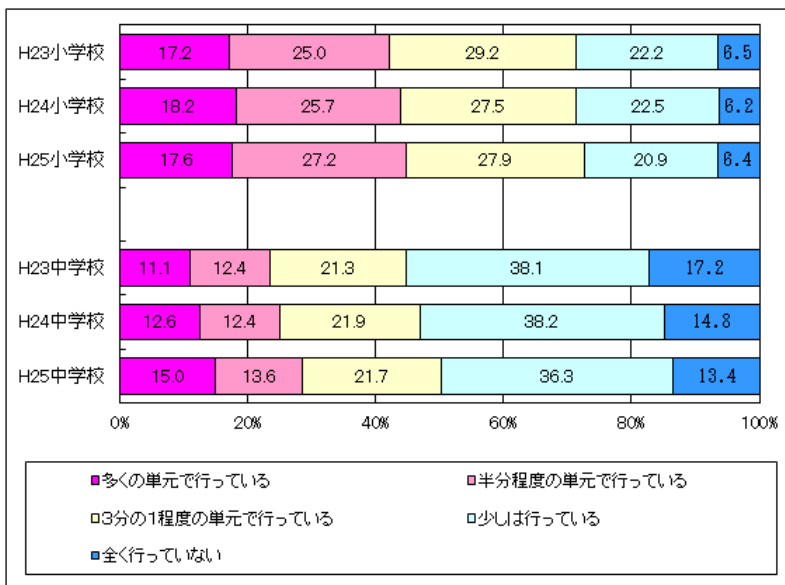


図1 「レポートや作文など書いて表現する活動を取り入れた授業を行っていますか」の回答の割合(経年比較)

平成25年度の結果を見ると、「多くの単元で行っている」「半分程度の単元で行っている」と回答した小学校教師の割合は44.8%であり、同じ回答をした中学校教師の割合は28.6%である。

経年で比較すると、小学校、中学校共に、「多くの単元で行っている」「半分程度の単元で行っている」と回答した教師の割合は増加している。特に、中学校においては「多くの単元で行っている」と回答した教師の割合が、平成23年度から平成25年度にかけて5.1ポイント増加している。[図1]

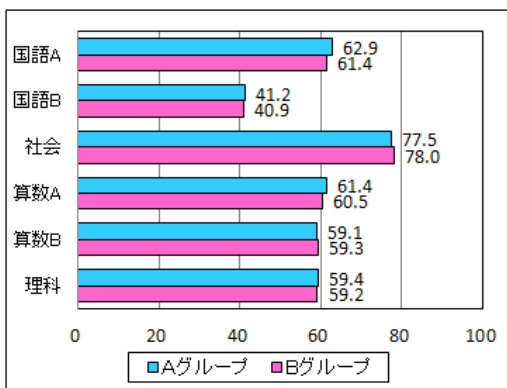


図2-1 書いて表現する活動を取り入れた授業の頻度と教科別平均正答率(小学6年生)

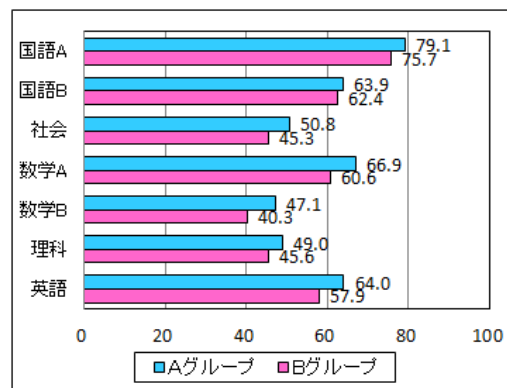


図2-2 書いて表現する活動を取り入れた授業の頻度と教科別平均正答率(中学3年生)

この設問においてAグループとBグループの教科別平均正答率を比較すると、小学校では、6教科中4教科においてAグループの平均正答率がBグループの平均正答率よりも高くなっている。中学校では、全ての教科においてAグループの平均正答率が高くなっている。特に、中学校では、数学A・数学Bと英語においては、6.0ポイント以上回る結果となった。[図2-1][図2-2]

イ 「発表や話し合い活動など表現し、考えを広げたり深めたりする活動を取り入れた授業を行っていますか」について

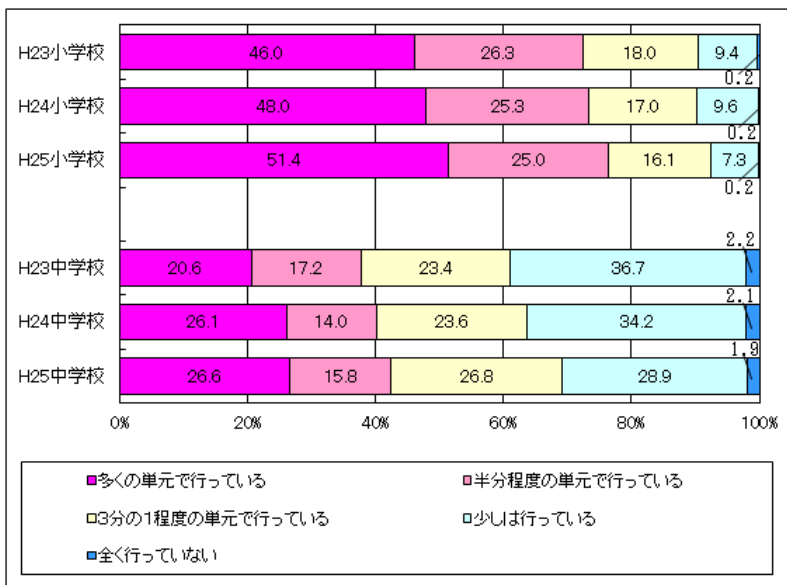


図3 「発表や話し合い活動など表現し、考えを広げたり深めたりする活動を取り入れた授業を行っていますか」の回答の割合(経年比較)

平成25年度の結果を見ると、「多くの単元で行っている」「半分程度の単元で行っている」と回答をした小学校教師の割合は76.4%である。これに対し、同じ回答をした中学校教師の割合は42.4%である。

経年で比較すると、小学校、中学校共に、「多くの単元で行っている」「半分程度の単元で行っている」と回答した教師の割合は増加している。特に、中学校においては、「多くの単元で行っている」と回答した教師の割合は、平成23年度から平成25年度にかけて、6.0ポイント増加している。小学校、中学校共に学習活動において、発表や話し合い活動などの言語活動の場を設定する傾向がある。[図3]

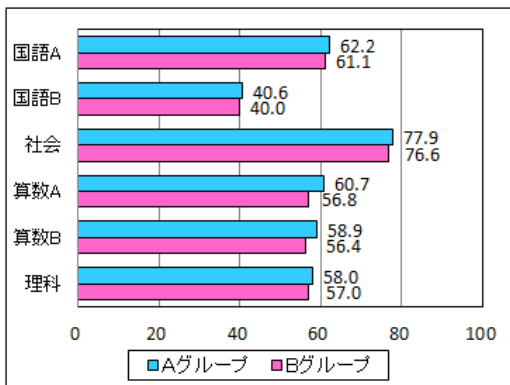


図4-1 考えを交流する活動を取り入れた授業を行っている頻度と教科別平均正答率 (小学6年生)

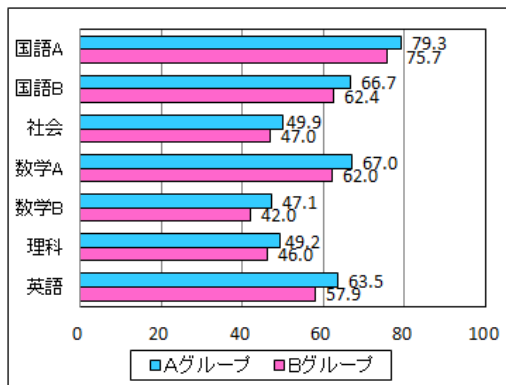


図4-2 考えを交流する活動を取り入れた授業を行っている頻度と教科別平均正答率 (中学3年生)

この設問においてAグループとBグループの教科別平均正答率を比較すると、小学校、中学校ともに、全ての教科においてAグループの平均正答率が高くなっている。[図4-1][図4-2]



ウ 「単元における学習目標や評価規準を明確にした上で、その目標を達成するために必要な教材や学習活動を指導計画に取り入れて指導を行っていますか」について

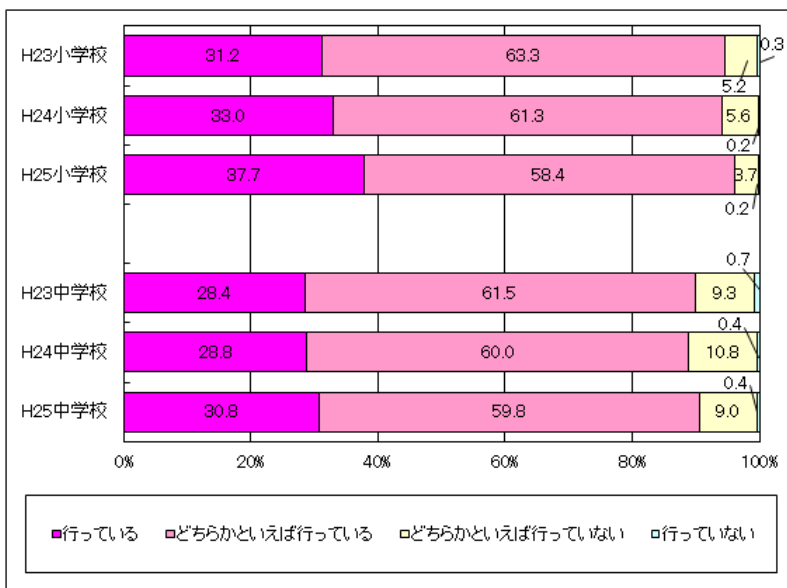


図5 「単元における学習目標や評価規準を明確にした上で、その目標を達成するために必要な教材や学習活動を指導計画に取り入れて指導を行っていますか」の回答の割合(経年比較)

平成25年度の結果を見ると、「多くの単元で行っている」「半分程度の単元で行っている」と回答をした小学校教師の割合は96.1%であり、同じ回答をした中学校教師の割合は90.6%である。

経年で比較すると、小学校、中学校共に、「多くの単元で行っている」と回答した教師の割合が増加している。[図5]

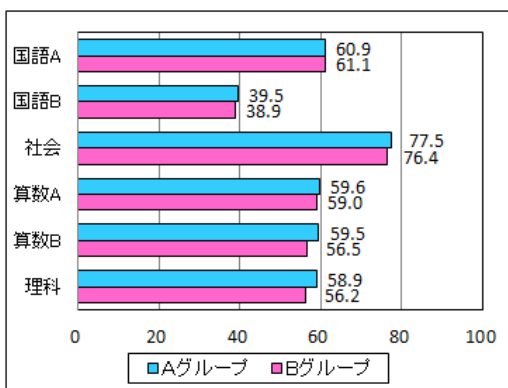


図6-1 指導と評価を一体とした授業の頻度と教科別平均正答率(小学6年生)

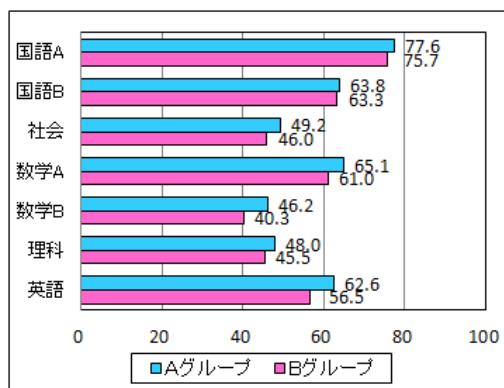


図6-2 指導と評価を一体とした授業の頻度と教科別平均正答率(中学3年生)

この設問においてAグループとBグループの教科別平均正答率を比較すると、小学校では、6教科中5教科でAグループの平均正答率が高くなっている。中学校では、全ての教科においてAグループの平均正答率が高くなっている。[図6-1][図6-2]

エ 「日常の授業や単元等の指導、学校における教育活動において、PDCAサイクル(計画→実施→評価→改善)を踏まえた実践を行っていますか」について

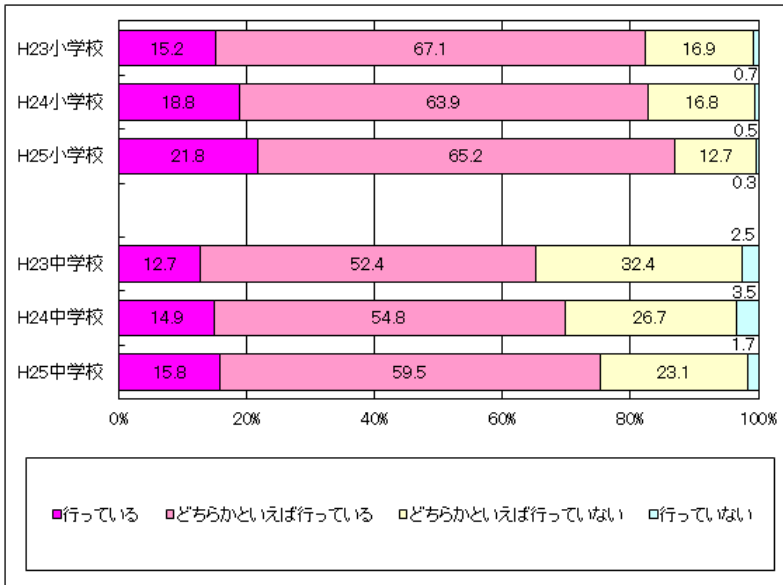


図7 「日常の授業や単元等の指導、学校における教育活動において、PDCAサイクル(計画→実施→評価→改善)を踏まえた実践を行っていますか」の回答の割合(経年比較)

平成25年度の結果を見ると、「行っている」「どちらかといえば行っている」と回答した小学校教師の割合は87.0%であり、同じ回答をした中学校教師の割合は75.3%である。

経年で比較すると、小学校、中学校共に、「行っている」「どちらかといえば行っている」と回答した教師の割合が増加する傾向が見られる。

[図7]

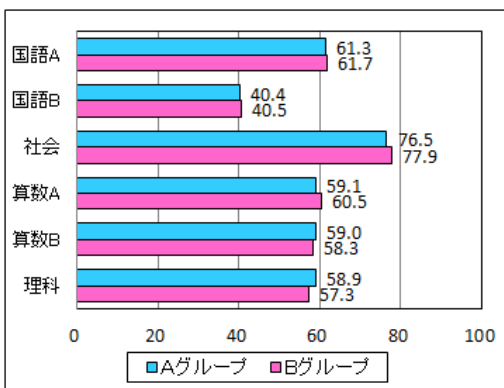


図8-1 PDCAサイクルを踏まえた実践をしている頻度と教科別平均正答率(小学6年生)

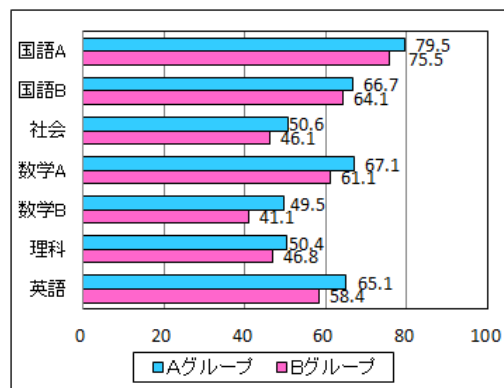


図8-2 PDCAサイクルを踏まえた実践をしている頻度と教科別平均正答率(中学3年生)

この設問においてAグループとBグループの教科別平均正答率を比較すると、小学校では、大きな違いは見られない。中学校では、全ての教科においてAグループの平均正答率が高くなっている。特に、中学校では、数学A・数学Bと英語においては、6.0ポイント以上回る結果となった。[図8-1][図8-2]

## ○ これからの指導に向けて

### PDCAサイクルを踏まえた指導と評価の一体化

今回の調査結果から、各教科の指導に当たって、PDCAサイクルを踏まえた指導と評価の一体化が、学力の定着と向上に効果的であることがうかがえた。指導と評価の一体化によって、学習指導のねらいを明確にし、授業実践、学習評価をすることで、児童生徒一人一人の学習状況を把握でき、その後の指導の工夫、改善や個に応じた指導の充実が図られたからだと考える。

まず、指導計画の作成においては、生徒に身に付けさせたい学習内容から学習目標を設定することが重要である。また、学習目標の設定とともに、学習目標の到達度を評価するための評価規準の設定や評価規準に対応した評価方法・評価基準を準備しておくことで、評価方法の妥当性、信頼性が高まり、授業実践においても指導と評価を着実に実施することができるものと考えられる。

次に、作成した指導計画に基づく授業実践においては、学習目標を達成するために必要な教材を選択したり、学習活動を取り入れたりして授業を展開することが重要である。学習活動については、今回の調査結果から、レポートや作文、発表、話し合いなどの言語活動を充実させることが、効果的であることが読み取れた。言語活動を充実させることで、基礎的・基本的な知識及び技能の定着や思考力・判断力・表現力の育成が図られるからだと考えられる。

そして、学習評価については、児童生徒の学習意欲を喚起する視点から、学習の成果だけでなく学習の過程を一層重視していくことが大切である。児童生徒のよさや進歩の状況などを積極的に評価し、児童生徒がどれだけ成長したかを評価していくことが大切である。また、評価方法については、観察、ノート、ワークシート、作品、ペーパーテストなど様々な方法が考えられるが、評価の観点や評価の場面などにおいて児童生徒の学習状況を的確に評価できる方法を選択していくことが重要である。

最後に、児童生徒の学習評価の結果は、一人一人の学習状況を把握するだけでなく、児童生徒の形成的な評価として、評価後の指導に役立てることが、児童生徒の更なる学力の定着と向上につながることも重要である。また、指導の改善や工夫に生かし、教師が指導の過程や評価方法を見直すことにより、更に効果的な指導が行えるように、工夫や改善を図らなければならない。

最終更新日:2013-10-21

# 平成25年度佐賀県小・中学校学習状況調査及び全国学力・学習状況調査を活用した調査Web報告書

[Web報告書もくじ](#) > IV 教師意識調査結果の分析

## 教師意識調査結果の分析

[教師意識調査の全てのグラフ\(Ⅱ 教師像共通グラフへ\)](#)

### 2 学習環境の活用

- ICT機器を授業で活用する頻度は、小学校の方が中学校に比べて高いことがうかがえた。[図1]
- 授業においてICT機器を活用している場面には、小学校と中学校とで共通点が見られた。[図2-1][図2-2]
- 学校図書館を授業で活用する頻度は、小中学校に違いが見られた。[図3]

この節では、授業におけるICT機器と学校図書館の活用頻度や活用場面について分析する。  
なお、学校図書館を活用した授業については、経年比較をし、分析する。

ア 「ICT機器を活用した授業を行っていますか(本調査におけるICT機器とは、コンピュータ、プロジェクター、電子黒板、実物投影機、書画カメラ、タブレットPC、デジタルビデオカメラなどを指します)」について

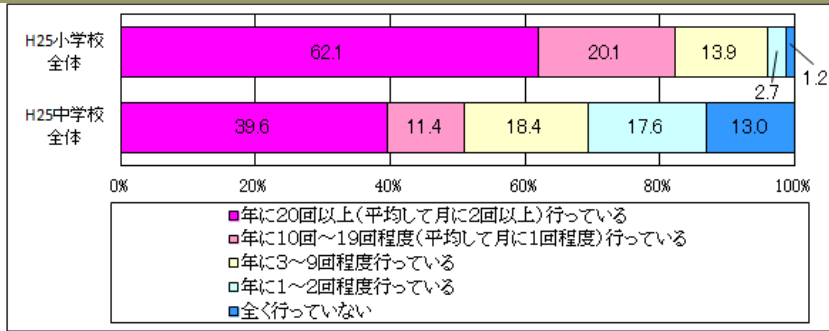


図1 ICT機器を活用した授業を行っている割合

平成25年度の結果を見てみると、「年に20回以上(平均して月に2回以上)行っている」「年に10回から19回程度(平均して月1回程度)行っている」と回答をした小学校教師の割合は、82.2%であり、同じ回答をした中学校教師の割合は51.0%である。これに対し、「年に1～2回程度行っている」「全く行っていない」と回答した小学校教師の割合は、3.9%であり、同じ回答をした中学校教師の割合は30.6%である。このことから、中学校では、小学校と比べて、ICT機器を活用した授業があまり行われていない傾向が見られる。[図1]

## イ 「ICT機器を授業のどのような場面で活用していますか(複数回答可)」について

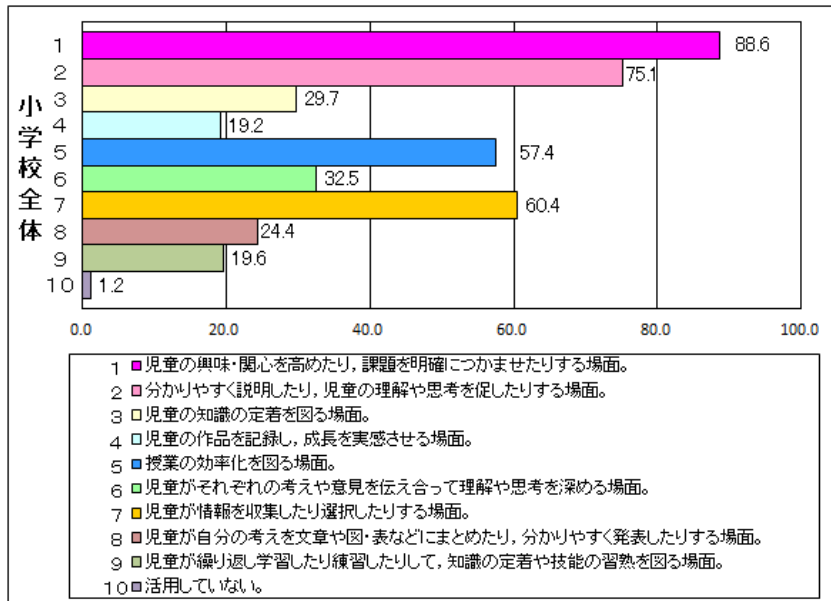


図2-1 「ICT機器を授業のどのような場面で活用していますか(複数回答可)」の回答の割合

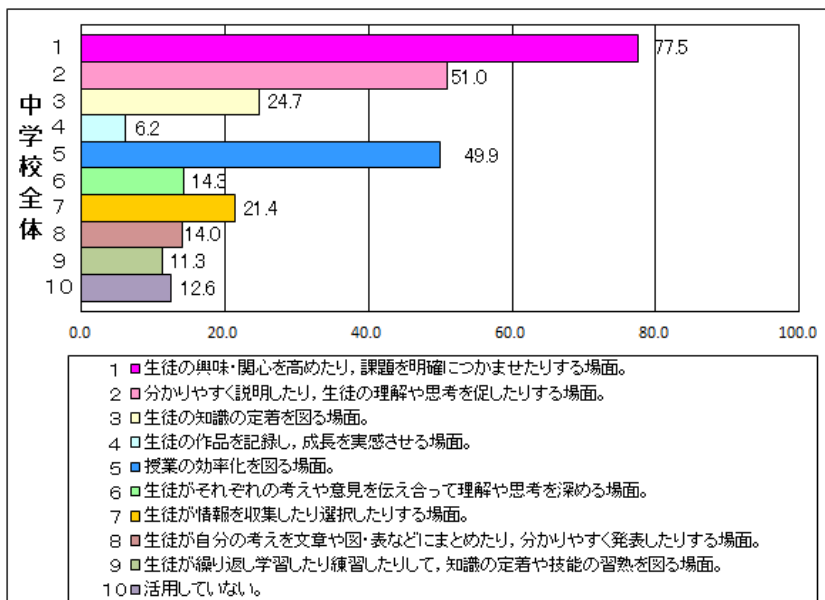


図2-2 「ICT機器を授業のどのような場面で活用していますか(複数回答可)」の回答の割合

小学校と中学校の両方とも、ICT機器を活用する頻度が最も多い場面は、「児童・生徒の興味・関心を高めたり、課題を明確につかませたりする場面」であり、次に頻度が高いのは、「分かりやすく説明したり、児童・生徒の理解や思考を促したりする場面」であった。また、授業でICT機器を活用していると回答したものの中では、小学校・中学校ともに「児童・生徒の作品を記録し、成長を実感させる場面」でICT機器を活用する割合が最も少なかった。[図2-1、図2-2]

## ウ 「学校図書館を活用した授業を行っていますか」について

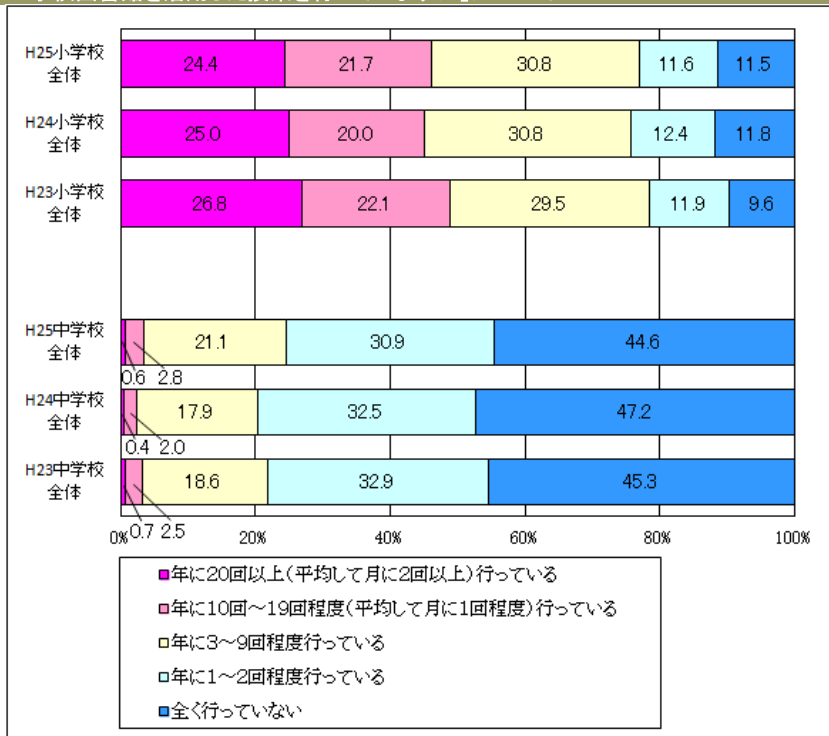


図3 「学校図書館を活用した授業を行っていますか」の回答の割合(経年比較)

平成25年度の結果を見てみると、「年に20回以上(平均して月に2回以上)行っている」「年に10回から19回程度(平均して月1回程度)行っている」と回答した小学校教師の割合は、46.1%であり、同じ回答をした中学校教師の割合は3.4%である。これに対し、「年に1～2回程度行っている」「全く行っていない」と回答した小学校教師の割合は、23.1%であり、同じ回答をした中学校教師の割合は75.5%である。このことから、中学校では、小学校と比べて、学校図書館を活用した授業があまり行われていない傾向が見られる。平成23年度、平成24年度の結果を見てみると、同様の傾向が見られる。小学校、中学校共に、学校図書館を活用した授業に対する教師の意識に大きな変化は見られない。[図3]

## エ 「授業では、学校図書館を主にどのように活用していますか」について

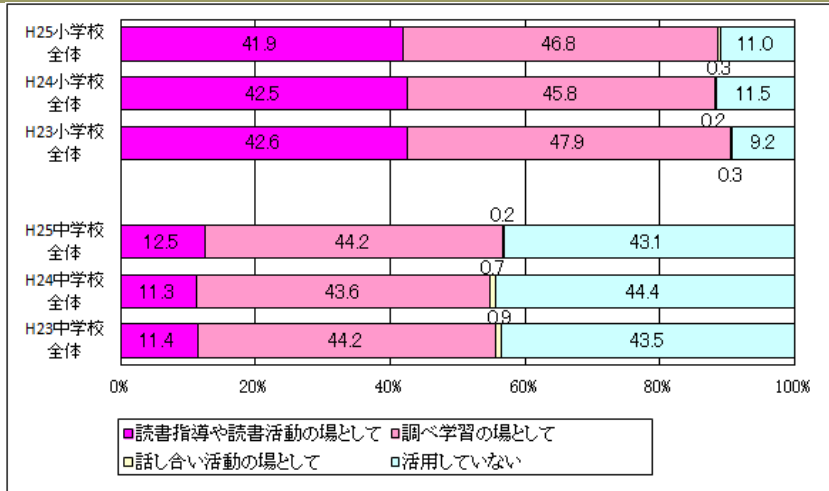


図4 「学校図書館を活用した授業を行っていますか」の回答の割合(経年比較)

平成25年度の結果を見てみると、学校図書館を活用していると回答した教師の中では、小学校、中学校共に「調べ学習の場として」と回答した教師の割合が46.8%、44.2%と最も高くなっている。次いで、小学校、中学校共に「読書指導や読書活動の場として」と回答した教師の割合が41.9%、12.5%となっている。平成23年度、平成24年度の結果を見てみると、同様の傾向が見られる。このことから、小学校、中学校共に、平成23年度から平成25年度にかけて、授業において学校図書館を活用する場面に対する教師の意識に大きな変化は見られない。[図4]



## ○ これからの指導に向けて

## ICT機器や学校図書館を活用した授業づくりを

平成24年度同様、平成25年度佐賀県教育の基本方針において、ICT利活用教育の推進が掲げられている。ICT機器は、コンピュータ教室だけではなく、普通教室や特別教室、学校図書館、体育館など様々な場所で活用できる。ICT機器には、コンピュータ、プロジェクター、電子黒板、実物投影機、書画カメラ、タブレットPC、デジタルビデオカメラなどが含まれ、その特性に応じた活用をする必要がある。文部科学省が作成した、『学力向上 ICT活用指導ハンドブック』(委嘱：一般財団法人コンピュータ教育開発センター)で述べられているICT機器を活用する主な利点は次の通りである。

- ①写真や図表を大きく提示して指示を明確にすることができる
- ②見せながら話して、分かりやすく説明やまとめをすることができる
- ③身近に感じる教材を使って関心や意欲を高めることができる
- ④学習教材やソフトウェアで知識や技能を定着することができる
- ⑤インターネットを使って最新情報を収集したり、その便利な機能を利用したりすることができる[※1]

学校図書館の機能には、主に児童生徒の「読書センター」としての機能と、児童生徒の「学習・情報センター」としての機能の2点が挙げられる。特に、「学習・情報センター」としての機能については、以下の4点の充実を図ることでその効果を高めることができると考える。

- ①学校図書館で、図書やその他の資料を使って授業を行うなど、教科等の日常的な指導において活用される。
- ②教室での授業で学んだことを確かめ、広げ、深める、資料を集めて、読み取り、自分の考えをまとめて発表するなど、児童生徒の主体的な学習活動を支援する。
- ③図書や新聞、インターネット等のデジタル情報など多様なメディアを提供して、資料の探し方・集め方・選び方や記録の取り方、比較検討、情報のまとめ方等を学ばせる授業の展開に寄与する。更に、司書教諭によるこれらメディアを活用した利用指導等の取組を通じ、情報活用能力を高めるための授業を自ら企画・実施する。利用指導等の取組を通じ、情報の探し方・資料の使い方を教える。
- ④児童生徒が学習に使用する資料や、児童生徒による学習の成果物などを蓄積し、活用できるようにする。[※2]

以上のことから、ICT機器や学校図書館を有効に活用した授業づくりを推進していくことで、児童生徒の意欲的な学習活動を支援するとともに、各教科における知識・理解の定着、思考力・判断力・表現力等の向上、また、情報の収集・選択・活用能力の向上を図ることが大切である。

## 《参考文献》

- ※1 一般財団法人コンピュータ教育開発センター 『学力向上 ICT指導ハンドブック』 平成20年  
<http://www.cec.or.jp/monbu/report/handbook.pdf>

## 《引用文献》

- ※2 子どもの読書サポーターズ会議 『これからの学校図書館の活用の在り方等について(報告)』 平成21年3月  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/dokusho/meeting/\\_icsFiles/afieldfile/2009/05/08/1236373\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/dokusho/meeting/_icsFiles/afieldfile/2009/05/08/1236373_1.pdf)

最終更新日：2013-10-21

## 平成25年度佐賀県小・中学校学習状況調査及び全国学力・学習状況調査を活用した調査Web報告書

Web報告書もくじ>IV 教師意識調査結果の分析

### 教師意識調査結果の分析

教師意識調査の全てのグラフ(II 教師像共通グラフへ)

#### 3 家庭学習への関与状況

- 宿題の出し方について共通理解を図ることが、児童生徒の学力向上により影響を与えることがうかがえた。[図2-1][図2-2]
- 出した宿題に対して評価し、必要に応じて指導していく方が、児童生徒の学力向上につながるがうかがえた。[図4-1][図4-2]

ここでは、家庭学習への関与の状況を、職員間での共通理解と、宿題提出後の評価及び指導の状況から分析する。なお、学校スコアによるグループ比較においては、小学校、中学校の最高学年である小学6年生と中学3年生の結果を基に比較することとする。

#### ア 「宿題の出し方について、校内の教職員で共通理解を図っていますか」について

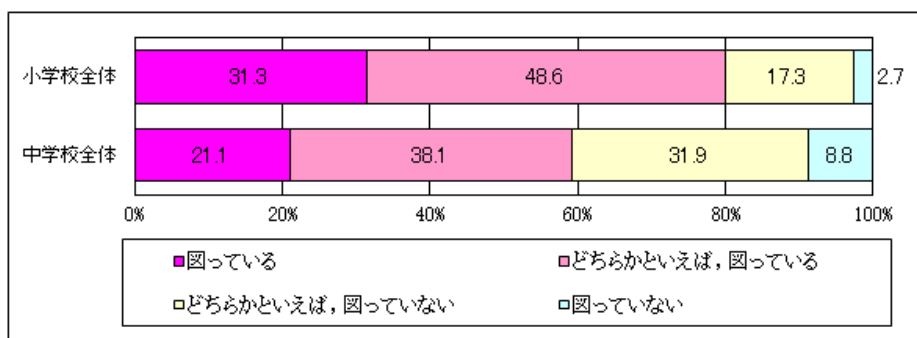


図1 「宿題の出し方について、校内の教職員で共通理解を図っていますか」の回答の割合

「図っている」「どちらかといえば、図っている」と回答した小学校教師の割合は79.9%、中学校教師の割合は59.2%であった。小学校の方が中学校に比べて共通理解を図っている割合が高い。[図1]

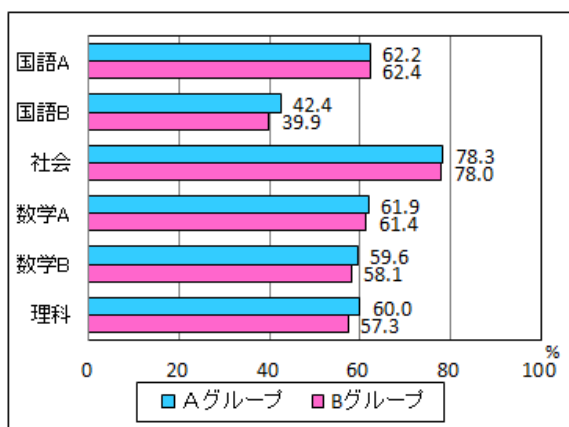


図2-1 宿題の出し方に対する共通理解と教科別平均正答率(小学6年生)

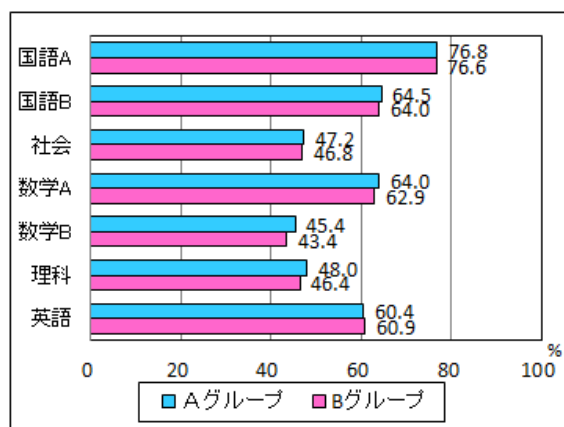


図2-2 宿題の出し方に対する共通理解と教科別平均正答率(中学3年生)

この設問においてAグループとBグループの教科別平均正答率を比較すると、小学校、中学校共に明らかな特徴は見られないものの、小学校においては全ての教科で、中学校においても7教科中5教科においてAグループが高い結果となった。宿題の出し方について教職員間で共通理解を図っている学校ほど、平均正答率が高くなる傾向が見られた。[図2-1][図2-2]

## イ 「児童・生徒に出した宿題について、評価・指導を行い返却していますか」について

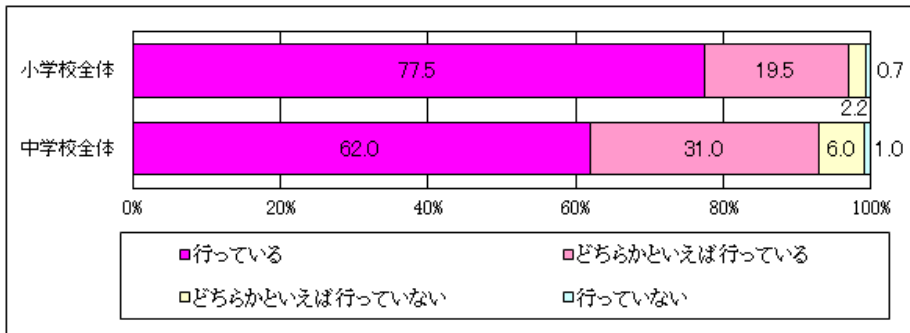


図3 「児童・生徒に出した宿題について、評価・指導を行い返却していますか」の回答の割合

「行っている」「どちらかといえば、行っている」と回答した小学校教師の割合は97.0%、中学校教師の割合は93.0%であった。小学校、中学校共に9割を上回る結果であった。出した宿題に対する評価・指導への意識の高さがうかがえる。【図3】

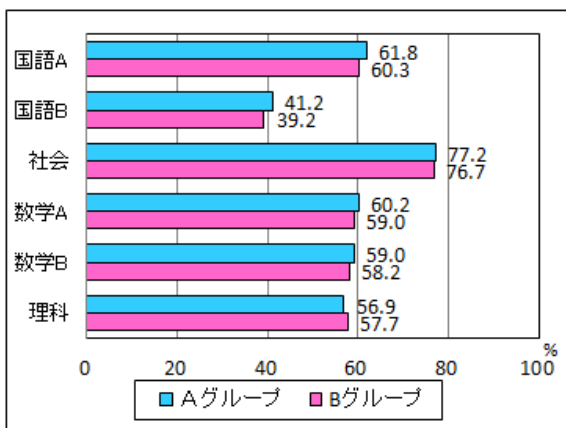


図4-1 出した宿題に対する評価・指導と教科別平均正答率(小学6年生)

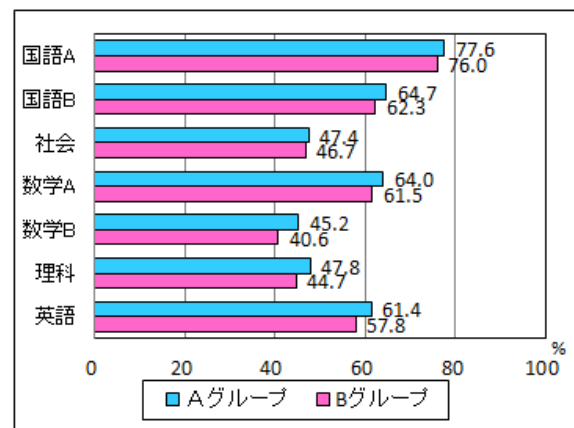


図4-2 出した宿題に対する評価・指導と教科別平均正答率(中学3年生)

この設問においてAグループとBグループの教科別平均正答率を比較すると、小学校では6教科中5教科において、中学校では全ての教科においてAグループが上回っていた。特に、中学校の数学Bで4.6ポイント高くなっていた。【図4-1】【図4-2】

## ○ これからの指導に向けて

### 家庭学習の充実を図るために、教職員間の共通理解と宿題への評価と指導を

家庭学習の充実は、学力の向上を図るためにも大切であり、家庭との連携が必要となってくる。そのため、学校によっては、学校独自に家庭学習に対する手引きを作成し、家庭学習の重要性や家庭での学習方法などについて示している。手引きに示されている内容について教職員間で共通理解を図ることはもちろんのこと、宿題の出し方や内容等についても、小学校では学年間、中学校では教科担当間で共通理解を図っていくことが大切となってくる。例えば、宿題の出し方や内容については、教科のスキルの内容だけでなく、思考や判断、表現を伴う内容の宿題も合わせて出すなど、学校で課題となる内容をどのように出していくかについて共通理解を図ることで、一部の取組とせず、学年、または教科の取組としていくことが大切である。

また、宿題については、評価とそれに対する指導が必要となる。宿題を評価し指導して返却する割合が高い学校ほど正答率は高くなっていた。このことから宿題については評価し、内容の定着が不十分であれば、それに応じて適切な指導を行うことが望ましいと言える。しかしながら、教師が宿題の評価をしていく時間も限られており、十分な評価をしていくことができない状況も考えられる。そのような場合は、担任と教科担当者や級外とで連携を図りながら評価と指導に当たったり、児童生徒に自己評価をさせた後に提出させたりするなどの工夫をしていくことが考えられる。また、宿題の採点についてボランティアを募り、その方々に依頼することが考えられる。ボランティアの方と連携を図りながら、児童生徒の宿題の取組状況や学習した内容の定着状況を把握していくことも有効な方法と考えられる。

最終更新日：2013-10-21

# 平成25年度佐賀県小・中学校学習状況調査及び全国学力・学習状況調査を活用した調査Web報告書

Web報告書もくじ> IV 教師意識調査結果の分析

## 教師意識調査結果の分析

教師意識調査の全てのグラフ(II 教師像共通グラフへ)

### 4 学校組織マネジメントに対する意識

- 教育活動の具体的な内容について共通理解が図られていると回答したり、気軽に話し合える雰囲気があると回答したりした教師の割合は増加する傾向が見られた。[図1、図3、図5]
- 教師の目的の共有化と教師間の連携や協力体制が充実している学校ほど、正答率が高くなる傾向がみられた。[図2、図4、図6]

ここでは、学校組織マネジメントに対する意識について、教育活動方針の理解、方針や内容についての共通理解、職員間の雰囲気の状態から分析する。

なお、学校スコアによるグループ比較においては、小学校5年生と中学2年生の結果を基に考察することとする。

#### ア 「あなたは、学力向上や生徒指導など教育活動の具体的な内容についての学校の方針を理解していますか」について

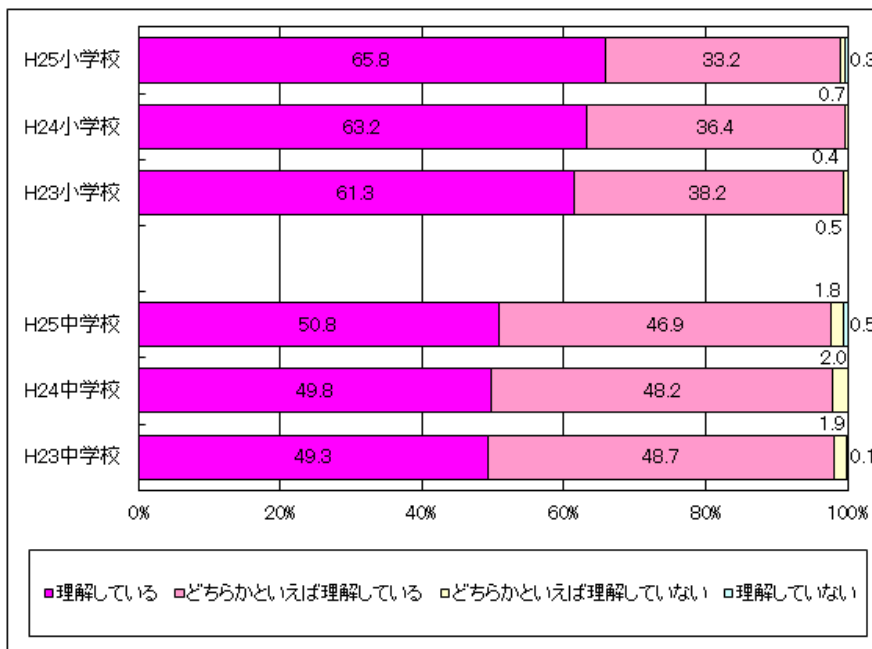


図1 学力向上や生徒指導など学校方針を理解している割合(経年比較)

平成25年度の調査結果において、学力向上や生徒指導など教育活動の具体的な学校方針について「理解している」「どちらかといえば理解している」と回答した教師に割合は、小学校が99.0%、中学校が97.7%であった。小学校と中学校を比較してみると、「理解している」と回答した割合は中学校が小学校より15ポイント上回っている。経年比較で見ると、「理解している」と回答した教師の割合は小学校、中学校共に増加している。[図1]

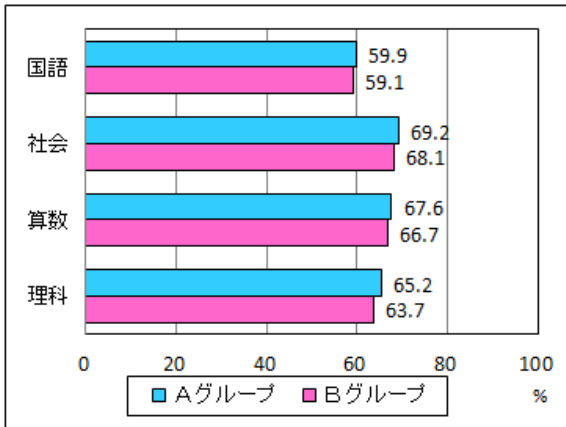


図2-1 学力向上や生徒指導など学校の方針に対する理解度と教科別平均正答率(小学5年生)

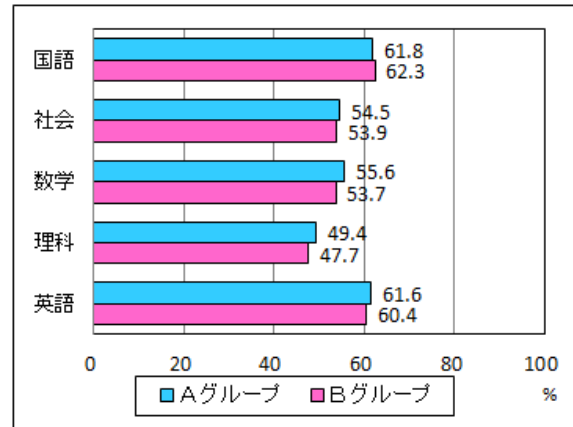


図2-2 学力向上や生徒指導など学校の方針に対する理解度と教科別平均正答率(中学2年生)

この設問で、AグループとBグループの教科別平均正答率を比較すると、小学校においては、Aグループが全ての教科においてBグループの平均正答率を上回っている。中学校においては、Aグループの社会、数学、理科、英語の4教科がBグループの平均正答率を上回っている。[図2-1][図2-2]

## イ「あなたの学校では、教育活動の方針や具体的な内容について、学校全体で共通理解が図られていると思いますか」について

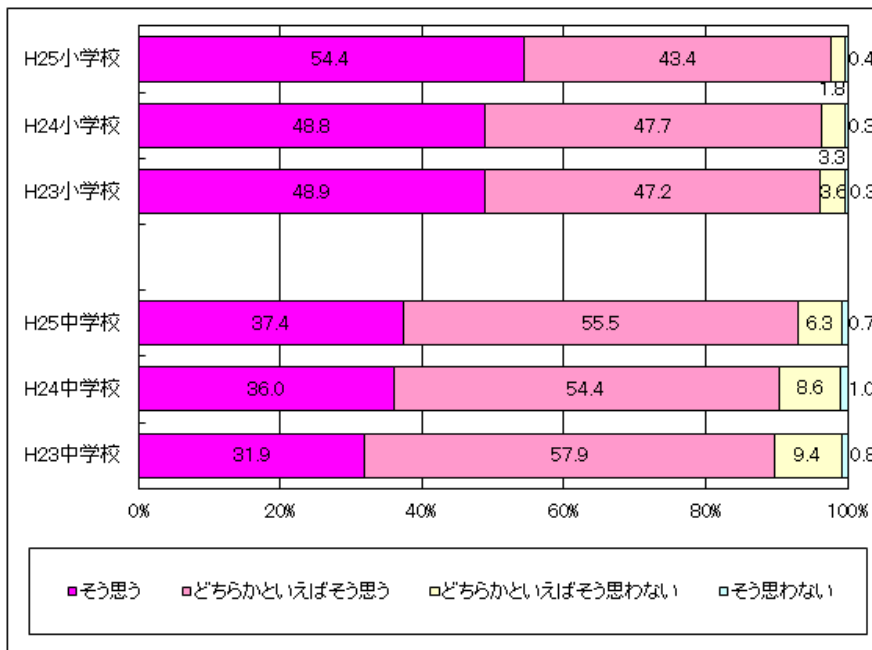


図3 教育活動の方針や具体的な内容についての共通理解が図られている割合(経年比較)

平成25年度の調査結果によると、学校全体で共通理解が図られているかについて「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答した教師の割合は、小学校が97.8%、中学校が92.9%であった。小学校と中学校を比較してみると、「そう思う」と回答した割合は、小学校が中学校を17.0ポイント上回っている。経年比較でみると、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答した割合は、平成23年度から年々増加している。[図3]

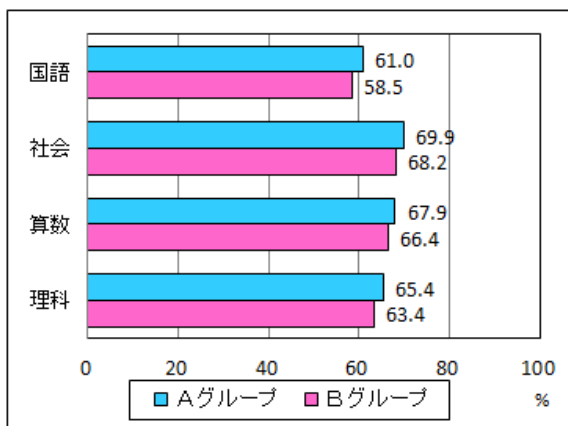


図4-1 学力向上や生徒指導など学校の方針に対する理解度と教科別平均正答率(小学5年生)

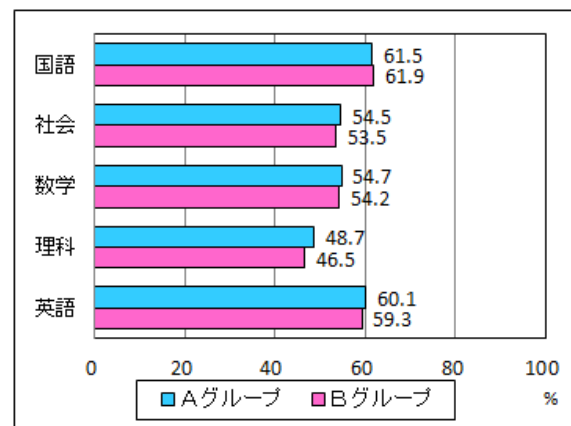


図4-2 学力向上や生徒指導など学校の方針に対する理解度と教科別平均正答率(中学2年生)

この設問で、AグループとBグループの教科別平均正答率を比較すると、小学校においては、Aグループが全ての教科でBグループの平均正答率を上回っている。中学校においては、Aグループの社会、数学、理科、英語でBグループの平均正答率を上回っている。[図4-1][図4-2]

## ○ これからの指導に向けて

### 学校組織マネジメントに対する意識との関連

学力向上や生徒指導などの指導に当たる場合は、学校全体で指導の具体的な内容について共通理解を図ることが大切である。今回の調査から見ても、教師の目的の共有化と教師間の連携や協力体制が充実している学校ほど、正答率が高くなる傾向であった。今後、小学校、中学校共に学校組織マネジメントを充実させ、学力向上や生徒指導の具体的な内容について共通理解を図り、1つの目的に向かって全教師が共通した指導を行うことができるようにしたいと考える。

---

最終更新日:2013-10-21